

第四章 アメリカの挑戦

一 日米交渉の成否

十一月十七日の臨時議會に於いて、東條首相は實に日本帝國として斷乎排撃せねばならぬ三大鐵則を明かにし

一、帝國の所期するところは、帝國の存立を確保し、支那事變の意義を完遂するにあり
二、今や重慶抗日力を支持する唯一のものは、活潑なる第三國の經濟的、軍事的補給である。

三、帝國の要望するところは、帝國の企圖に對する第三國の妨害と脅威を除き、禍亂の東亞波及を防止するにあり。今や帝國は實に悠久二千六百餘年の歴史上、空前の國家隆替

の岐路に立ち、一大飛躍をなさんとする秋に際會し、政府は國民と共に一九一苦、難關突破を期せんとす。と。

また日米交渉にあたつて東郷外相は、事理すこぶる明白に、すでに彼我の見解は、半歳に亘つて委曲を盡くし、技術的にも今後更に長時間を費す要なし、問題の楔子は今やアメリカ政府の反省互讓の精神如何に繫つてゐる。しかも我が協調的態度にも自ら限度あり、事苟くも帝國の生存を脅かし、大國としての權威を毀損さるるときことあらば、敢然としてこれを排除すると喝破した。

かくて來栖大使の米國派遣となり、日米交渉は逆睹し難い風雲をはらんで、太平洋の波愈々高く、日本國民の最後の斷を要望する。

『敵を知り、己を知らば百戰危ふからず。』と。我等はこれより米國の歴史的發展を叙し、太平洋争覇の運命を凝視せんとするであらう。

二一 アメリカの建國

アメリカ大陸は新世界にあらすして、有史前よりアジア系日本人系の領有せる地であつた。

古代アメリカ大陸に生存した人種は北アジアより移住せる *Homo Americanus* であり蒙古人種の一つであつた。なほ黒潮の流れによつて、アジアより、メキシコ方面に漂着したアジア石器人種もあり、これ等が『塚造り』と呼ばれ、アメリカ・インディアンの祖とされる。——上代日本文化圏に屬する古代アメリカ人は、日本古代の塚と全く同じ形式の『塚』を多數に残してゐる。——西はロッキー山系より、東はミシシッピ河まで、北は大湖地方より、南はメキシコ灣におよぶ北米一帯に發見された圓錐塚、——實に北米古墳分布圖

を一見すれば、いかに古代アジア系の人種が全アメリカを領有せるかを知るのである。

アメリカ大陸は決して白人の所有ではなく、數千年大いなる森林と豊かなる土地とは美しき平和な樂園として、眞に自由の大自然に恵まれつつ、インデアンによつて守られ來つたのであつた。

古代のアメリカ人——それは、すべて東洋的アジア精神の所有者であり、高度の清き精神生活と、つつましき物質慾——彼等の太陽に對する大いなる神話——山上に立ち日出日没における太陽への讃歌は、美しき自然との交感であり、彼等は自然を崇拜し、何等自然を害することなく黙々として自然の防衛者の如くそれを愛し育ててゐた。

十五世紀——スペイン・ポルトガルのユダヤ人迫害に端を發し、兩國より追放せられたるユダヤ人は、七十萬餘に達し、彼等は『さまよへるユダヤ人』として全歐を放浪した。ここにユダヤ人コロンプスは、ユダヤ人の新しき世界を求むべく、マルコ・ポーロの

『東方見聞記』に記された、黄金の島ジバングに向つて進まんとした。これを援助せるものは、スペイン王室收税官たりしヴァレンシヤ商業會議所長ルイス・ド・サントンゲルといふユダヤ人にして、彼は同じユダヤ人なる藏相と共に、女王イサベラを巧みに勧誘し、王室より三十萬圓を無利子にてコロンプス（彼は本名をクリストバル・コロンと呼び、父はドミン・コロン、母はフォンタナザロにてユダヤ人である。）に貸し與へ、一四九二年コロンプスのアメリカ到着によつて始めて、ヨーロッパの一般的認識となつた。

ここにスペイン、フランス、イギリス等より盛んに移住し始め、また歐洲より追放せられたユダヤ人は數十萬南、中米に移住を始め、なほ北米にも入つて、一六五四年ニューヨークの前身なるニューアムステルダムを建設した。

ことにエリザベス女王時代植民地政策を大いに奨励し、一六二〇年『五月花』^{Mayflower}號に乗れる清教徒は、クロムウェル革命の同志の集團であり、英本國の壓迫より、イギリス國教に

反對して、自由を求めて新大陸への移住となり、マサチューセツ州のプリマスを中心に自由なる信仰と生活を始めたのであつた。

豊潤なる大自然、鬱々とそびゆる大森林、素朴善良なるインディアン、無数の生物の群——其處は舊ヨーロッパの偏狹にして陰慘なる社會とは全く異なり、洋々たる希望に満ちた新世界の展望が、いかに彼等の貪慾な瞳を輝やかさしめたことであらう。

始め原住民は、これ等の白人に敵意を抱くよりも、むしろそれを歓迎した。彼等は白人の無一物たる移住者に對し、食物を與へ、器具農具を貸し、獵具を使はしめ、苛酷なる冬季、暖かき家を貸し與へたのは、まことにこれらインディアン自らの家であつたのである。しかもこれ等白人は（彼等は殆んど荒々しい前科者か海賊であつた。）大陸に移住するや、その本國に於いて迫害せられし性格は、イギリスより送られた凶惡なる犯罪者の植民とあひまつて、平和なる生活に對し、惡魔の如き變革を與へたのであつた。

この歐洲移民群は、憧れた自由の天地の開拓が、彼等の希望したよりも甚だ困難なるを知るや、——その希望實現の爲にまづアフリカ土人を奴隸として開墾に酷使した。

黒人の奴隸貿易、——それはアメリカ發展の最大の力であつた。

さらに白人は忘恩にも、彼等に食を與へ呉れし土着のアメリカ・インディアンに對しては彼等の有つ物質に對する恬淡、純潔に對する要求、素朴にして善良なる、平和的原住民の純粹なる心を逆用して、彼等を欺瞞し、排撃し、壓迫し、奸計をもつて彼等の土地財貨を奪取し、見る見るインディアンの生活權を奪ひ、その生命線を下下さしていつた。しかも彼等は絶対に白人に屈從して奴隸と化さず、後退し得ざる場合は、いさぎよく戦つて死するのみであつた。かくて見るも悲惨な壓迫により、平和で豊穡な田園山林はすべて白人の手に強奪され、それを防がんとすれば、一舉にそれを機會に全部落さへ潰滅されるのであつた。

この哀切極まるアメリカ土人の没落は、空しき悲歌に涙しつつ、懐かしい故郷を捨てて西へ、西へと移住し、その山奥に逃避して僅かに、かすかな魂の反響をつたへるのみである。

しかも『西方へ』(Westward, Ho!)『西方へ』——この白人の狂ほしき叫びこそ、まことに近代歐米侵略主義のスローガンであつた。

數千年平和なる大陸を我が家として三百萬平方哩の地を占有せしアジア的原住民は、僅か近々二百年の中にあらゆる暴力と偽瞞によつて、今や彼等の領有する地は五萬平方哩に過ぎない。

この間イギリスにおいては、このアメリカ植民の自由を認めず「航海條例」等を出し、植民地の通商を拘束し壓迫は益々激しくなつた。

かくて植民地側にも大なる反對が生じ、パトリック・ヘンリー等の「自由か、而らずん

ば死』かの愛國者の叫びは、イギリス反對の痛論となり、漸く一般の輿論は反英的に轉化した。

かのワシントンは當時イギリス政府から土地測定技師として派遣されたものであり、彼はそれを利用して土地の利権を獲得したのであつた。かくて後年の彼の革命行動の中には明かに土地利権の喪失に反對する意圖を否定し得ないのである。

植民地アメリカはイギリスの壓迫に對し、極度の反感を示しつつも、尙イギリスの國力に對し絶對的な恐怖を抱いてゐた。

が、今やインディアンの廣大なる地盤を奪取するや、ここに鬱積せる反抗心は遂に猛然と爆發し、一七五五年獨立革命の火は燃え上つた。

イギリス軍は革命勃發と共に、ゲーヂ將軍に率ゐられてポストン占領——バンカーヒルの悲壯なる争奪戰——イギリス軍は刻々と兵器乏しく訓練なき烏合の衆たる植民地軍を壓

迫、ここにワシントンが革命軍の總司令となり、直ちにポストン包圍攻撃に進んだ。

この時フランスはアメリカ獨立を承認し、これを援助するため、艦隊はすでにフランスの埠頭を出でたと報じられた。——フランスにこの決意をなさしめた功勞者こそベンチャミン・フランクリンの存在であつた。

一七八一年佛將ラファエツトはヴァージニアに來りて獨立軍を援け、かくて米佛兩軍はクロオンウオリスを攻圍し、英軍力屈し遂に米軍に降つた。

この勝報來るや全米國人は歡呼し、フィラデルフィアの公會堂の鐘聲は高らかに自由の鐘を奏し、祝火は遠く夜を照し、獨立の功業を照り輝かした。

かくてアメリカの獨立戰爭は、フランス革命の自由思想家による同一のイデオロギー思想體系、——自由、平等、人權の宣言——によつて、すべてのものはルソーの言ふ如く社會的契約としてアメリカの國は、形成され、近代的自由共和制が確立し、『契約の國』アメ

リカは生誕した。かくしてアメリカは、世界諸民族の集合地帯であり、それ自らの内的統一性を有せず、單に利益的結合による共同存在を續けるものである。

三 アメリカの發展

アメリカ獨立の自由の鐘は、これこそあくまでも白人のみの自由であり、移入奴隸の壓迫はますます激烈を極めた。奴隸は鐵鎖に固く縛られ、自殺することも出来ない。奴隸船はそのまゝ生ける墓場であつた。——この奴隸船によるアメリカ國富の蓄積を知れ！

しかも白人の植民は老獺を極はめ、時に土人が憤怒すれば忽ち精銳の武器をもつて、大量的に殺害、掠奪し、その惨虐の跡を全く止めぬために、新しき虚構の事實を作り、これを眞の歴史として記す爲め、眞實の事象をば悉く偽虚として抹殺し、——かくて土人の虐

殺、壓制の史實は、たゞ僅かに土人の物語り記憶にのみ残り、それも遂に土人の減少と共に散ぎれ行く雲の如く、悲しき消滅をなすばかりであつた。

現代アメリカに於けるヨーロッパ文化の移植發展といはれるものは、まさに驚異すべき言語に絶した残忍の上に形成されたのであり、彼等はこの多くの虐殺の上に——キリスト教的人道主義のヴェールをもつて裝飾したのである。

アメリカ人でさへ「インディアンには好いも悪いもなく、只、彼等には死滅して行くインディアンがあるのみである」といひ、一八七七年のアメリカ大統領ヘースの國書には「わがインディアン戦争の大部分は我々アメリカ人が條約に違反し、利己的であつたことから起きたものなり」と記したのである。

筆者はここに衷心より我知識階級インテリ諸君にお傳へする。

最近アメリカ映畫で、白人アメリカが、西部の開拓史上、英雄化される人々こそ——實

はもと放埒兇暴の人間が、たまたま西部のインディアンに對し、いかに残忍極まる非人道的な虐殺を敢て爲し、その土地を強奪したかの「名譽」を表徴するものに過ぎないものであることを。しかもユダヤ資本による映畫の中で、殊更にインディアン容貌を兇惡に誇張し、これに毒矢をもたし、一方觀衆の喜びさうな美男俳優を白人の英雄に仕立てて、——かくて世界の人に向つてアメリカ人はインディアン兇暴に抗して、人道の爲めに起つたのであるとの思想戰を構成するのである。

が、すでに時代はかわりつつある。まことにリンカーンの言へる如く、

「すべての人を總べての期間欺くことは出来ぬ。」

横暴なる闖入者——貪慾なる掠奪者——非人道的なる侵略者——といま日本誹謗に對して彼等の用ふるこれらの言葉は、天に唾する者の如く、そのまゝ彼等白人に對して叫ばれてこそ、最も正しき意味を有するのを知れ!

その純情なるインディアンに對する血ぬられし忘恩と殺戮こそ彼等の發展を爲し來れるものであり、今や歴史は眞に第一頁より新しく書きあらためられねばならぬ。

さて、——これに比し、日本よりアメリカに移住せる開拓者のいかに高度にして、眞の開拓者としての無限の功蹟を示したことであらう。この最善なるアメリカの移住者に對して、アメリカ政府は却つてこれを壓迫するのであるが、これこそ白人アメリカの開拓當初の政策に外ならないことを知るであらう。

個人主義的自由思想と、利己的資本主義によつて、建設されたアメリカは、——その多入種の結合體であり、たゞ利益を共有することによつてのみ統一されてゐるのであり、それに反する限り離反するものである。かくて、アメリカのイギリスよりの獨立こそは、まさに眞個のこのことの最大の表示に外ならなかつた。

四 南北戦争の正體

南北の對立は、白人勞働者對黑人奴隸の戦ひであつた。當時黒人は南方において大なる經濟的地盤を占め、これに對する白人の政治的武力的侵略が眞の南北戦争の原因であつた。

黒人奴隸の廢止とは、黒人に對する人道主義的解放ではなく、かへつてその新しき抑壓であり、かの南北戦争にて人道の守りとされる、——ある佛國のユダヤ人史家が、「リンカーンの偉大は、シーザーに勝る」と言つた——リンカーンはその名の示す如くユダヤ系なることを知るべきである。

彼は人道上から奴隸を廢止せんとするよりも、彼がイリノイ州共和黨大會に於て試みた

る演説の如く「家内兩分したる家は存立する能はず。」として、過去の政治家が南部と北部との妥協によつて、一時を糊塗し來れるを白人アメリカ將來の一大危険となし、この問題を解決して北米合衆國を完全に統一せんと決心したのであり、彼は南北戦争進行中も愈々最後までは決して奴隸解放宣言を出さず、たゞ忠實に南北統一の爲めに戦つてゐたのも明かである。

さらにストウ夫人の記した小説『アングル・トムス・ケビン』は、かのユダヤ的宣傳と共に、全米國を風靡して、甚だしく民心を感情的に刺戟した。

しかも南北戦争中、黒人は自らの自由のため何らの反抗運動をも起さなかつたが、これは北方の奴隸解放が決して黒人のためによる運動にあらざるを明白に示す事實であり、——奴隸解放は白人自らの利益以外の何ものでもなく、南部の大土地所有に對し、北部の資本主義的挑戦であり、侵略であつた。かくして北方軍はむしろ黒人奴隸の、より深刻に

して有利なる賃銀奴隷の使用を企てたにすぎない。

この戦争において、——戦争はマツコーミツクの刈取機によつて勝たれた」と言はるゝ如く、農業機械が農場労働者の力にまさり、一躍アメリカ經濟を大量機械生産に移動せしめ、機械の時代に入るのであつた。

かくてアメリカは、南北戦争によつて、大資本大産業の統一としてのアメリカ帝國建設の段階に入つた。

黒人奴隷は戦争終結とともに、ますます悲惨なる生活に落ち、彼等には何らの自由による幸福はなく、以前より遙かに高き死亡率を示して、「樂しかりし昔」を悲しく回想するのみであつた。しかも解放され公權を與へられた黒人に對し、すべての必需品は拒否され、黒人はその生活圏を白人労働者によつて奪取されたに過ぎなかつた。

荒蕪の廣大な未墾地に對し、血と汗をもつて全生命を犠牲にする黒人の労働と苦惱に

よつて開拓された豊饒肥沃の新しき大地は、今彼等を奴隷解放の美名の下に追放することによつて、白人自らがその利益を悉く獨占せんとするのであつた。——これは獨り黒人ばかりでなく、日本、支那の移民、労働者もすべて同じ運命にさらされたのであつた。

かくの如く、人道と平等、自由の國アメリカにおいて、最も大規模な奴隷制が實現され幾多の有色人種を、新しき機械労働奴隷、或は開拓奴隷として酷使し、その悲惨なる血と汗の犠牲の上に、アメリカの富は蓄積され、その低級な物質文明は繁榮したのである。

今我等はここにこれ以上アメリカの侵略罪惡史を列擧するの餘裕をもたないが、しかも彼等の屢々口にするモンロー主義が、それぞれの時機に應じ、最もその利己的政策を示す如く、もし彼等の口にする自由、平等が眞實ならば、なぜに黒人、アメリカ・インディアン等にかゝる殘虐なる抑壓奪略を加へ來たのであるか、さらに日本人、支那人等のアジア移民に對し、なぜに不法極まる排撃擄取を爲し來つたのであるか、——これをもつて彼等の

人道主義が、憎むべき虚偽に充滿し、その美名の下に世界侵略獨占をなさんとする最強力なる武器なることを知らねばならぬ。

五日米戦争

アメリカの植民地政策は太平洋方面に進出し、ここにペルリの來朝となり、彼は和親條約を口にすれども、彼の意志は飽迄アメリカ植民地の獲得を目的としてゐたことを彼の手記は明白に物語つてゐる。

彼は海軍を率ゐて威壓的にその條約を結んだのであり——『黒船來る！』の驚愕は、明かに彼の武力的侵略の恐るべき野心を直覺した日本人の叫びであり、浦賀の砲聲こそ東洋の平和を破る合圖であつた。

しかも彼は琉球か、小笠原島の何れかを占取せんとし、すでにその占領を宣言したが、日本國內の熾烈なる攘夷的態度と、本國大統領の更迭のためこれを果さなかつたのである。

かくて一八九八年の米西戦争において、アメリカはその凶惡なる侵略行動を暴露し、ハワイ、南洋、フィリッピン等のあくなき領土獲得に邁進し、その資本主義的獨占を實現せんとするのであつた。

このアメリカの方向は、今や必然に日本の發展と尖銳なる對立をもたらし、殊に日露戦争以後、日本の國力の急激な強大化とともに、排日運動は俄かに激化し、遂に日米戦争の危機は幾度か迫つた。

第一次歐洲大戦において、アメリカは老大なる、富を吸収し、一舉にヨーロッパを抑壓し、かのユダヤ的なウイルソンの國際聯盟は、全世界を制せんとするかに見えた。しかも

アメリカは、日本の太平洋進出を抑止するために、四ヶ國條約を結び、また支那大陸への發展を拒否するために九ヶ國條約を結び、さらに英米が戦後の疲弊に苦しめるため、軍備縮小に名をかりて、日本の國力を不合理に壓迫するのであつた。

突如！ この歐米侵略による國際不合理に對する反撃として、滿洲事變勃發するや、アメリカはスチムソン外交をもつて、日本の正義を認めず、あらゆる侵略よばはりをしつつイギリスと共にあらんかぎりの障害をなすのであつた。

このアメリカの反日政策は、當時すでに日米戦争の危機を呼んだが、この時、彼等の挑戦を完全に撃破し得たのは、上海における日本海軍の絶對威力と、滿洲に於ける現地軍の斷乎たる態度によるのであつた。

このことはアメリカ海軍當局の自ら言明せる如く

『海軍力の不足なる理由をもつて、東洋遠征を中止せざるを得なかつた。』

のであつた。かくて彼等の狂熱的軍備擴張となるのである。

ここに幾度か叫ばれた日米戦争は今やその最後の段階に達し、今次來栖大使の派遣は日本の最後の決意を彼等に宣言するためであり、かくて尊皇攘夷による明治維新は、再びその同一の方向の強大化たる、世界維新と直ちに關聯するを見るのである。

六 日米經濟戰

支那事變勃發以來、アメリカはイギリスと協力して授蔣政策に全力を盡し、反日宣傳を世界的に試み、支那租界問題にては、日本と正面的に衝突し、また幾度か對日經濟封鎖、輸出禁止をもつて日本を脅威せんと企てるのであつた。

しかも今日獨伊の三國同盟強化さるるや、アメリカはそれに對しあくまでも反抗せんと

欲するも、その力關係の不足のため、止むなく孤立中立をなさんとするが如くであつた。しかもアメリカの最大の不安脅威とは、常に太平洋と日本との問題であり、ここにアメリカは自ら日本通商條約破棄を聲明し、九ヶ國條約廢棄に反對し、日本の所謂東亞共榮圈の主張を根本的に否認する。

かくて日米會談に際しては、表面『太平洋の平和』なる理想主義を掲げて日本を慰撫し傍ら大西洋方面と睨み合せた戰略的見地から會談を遷延せしめんとする。この間イギリスをワキ役として日本をして獨伊よりの離間を計り、孤立的な獨自の立場に還元せしめんとして、考獮且つ巧妙極まる戦法を行つてゐるのである。このことはルーズヴェルト大統領が一方においては日米會談を繼續せしめ、他方重慶の徹底的援助をイギリスの對日包圍陣強化と並行せしめつつ行つてゐる如き、あきらかにこれを證明するものである。日本は今こそ一切の現象的浮動の見方を排し、東亞に於けるアングロサクソンの完全なる共同謀略の

正體を直視しなければならぬ。

然らば今次支那事變の現段階において、英米の經濟封鎖がまさに宣戰布告と同一の狀勢を惹起しつつある時、果して日本經濟はこれに對抗し得るであらうか？ 果して眞に困窮するものは誰であらうか？

これについては世上流言區々たるものがあるのであるが、我々はここに於いても我國の各指導者層、特に官僚、財界の一部に於ける對英米的認識と對英米工作に關して、遺憾ながら甚しき誤謬と迷蒙とを示してゐることを指摘しなければならぬ。

日本の従來の親米政策は、あまりにも日本の弱味——しかもこれを科學的に檢討する時何等存在せざるものであるが、——を表面に出しすぎ、財界、官僚の指導的地位にあるものにして、みだりに之を口にし却つて商人國アメリカをして『日本怖るるに足らず』となし、今一押し威せば日本は戦はずして參るであらうとして、全艦をハワイに集中し、

或はニューヨークより全世界に向つて對日強硬脅威のゼスチアをなしつつある現状である。我々は今日米經濟戰に對し、次の如き呈言をなし、識者の考慮を患はしたのである。

一、鐵、鋼材、銑鑛、鐵鑛石、屑鐵等は、殆んど英米より輸入してゐたのであるが、すでに占領地域の莫大なる鐵資源は、それを開發することによつて何等他國よりの輸入を必要とせざるは勿論、なほ其他の鑛石においても支那の埋藏量は巨額であり、それを檢査、採掘するならば、必ず近き將來においてむしろ強大なる輸出國たることも考へられるのである。

二、占領地帯の農産物はその廣大なる面積と地味を有し、日本科學力によつて大規模に治水工事を實現し、水力電氣工事をなし、農業設備の萬全を期せば、支那の農産物は無限であり、これ等の豊富なる食糧物質をもつてドイツ、イタリアの工作機械と交換するならば、相互の利益は頗る莫大なものとなる。

三、今や一刻も速かに大陸開發を必須とし、大陸經營に於ける人的資源は、支那民衆の心を把握し、これに確固たる生活の安定を與へることによつて容易に得られ、熱情的多數の有爲な冒險者を、國家が積極的に大陸に進出さし、英米等の對日經濟封鎖に對せしめる

四、東亞新秩序建設に對し、援蔣政策を積極化せる英米に對し、經濟的に大陸の中南支より彼等をシャット・アウトし、彼等の支那權益は斷乎として沒收、破棄し、維新政府の言ふ如く、租界に對しても英米等に對し顧慮することなく斷乎これを清掃する。

五、アメリカの繁榮は一九三九年をもつて最高調とし、その十月のウォール街の大恐慌により俄然悲慘なる世界恐慌の中に没落した。しかも合衆國の貿易の一大特徴はその輸出超過を示すにあり、貿易の相手國の第一は隣國カナダであり、第二は我日本である。故に對日經濟封鎖をなすことによつて、日本物資を缺乏せしむるに有効なるかに見え乍ら、却つて日本に對する輸出禁止は、日本の國家よりもむしろアメリカの經濟混亂を生ずるこ

とはるかに大である。何となれば

イ、西部における日本人による農業、工業發展の中絶

ロ、アメリカの水産業が殆んど日本人の手によつて行はれつつあることの爲めに受くる損失

ハ、アメリカの海運労働者の不満

ニ、日本はアメリカより石油、鐵等を輸入してゐるのであるが、これを新しく南洋及蘭印、支那占領地帯に求める

ホ、アメリカ經濟力の地盤は全體主義國家との共同戦線により、さらに日本によるアジア經濟封鎖の斷行こそ、アメリカの貿易に致命的打撃を與へるものである

六、金の超過せる流入は、アメリカをしてこれを死蔵せしめ、その金融力を硬化さし、却つて自らを拘束し、窮迫せしむる必然性を暴露する。ルーズヴェルトは三三年の銀行大

パニックに對し、ユダヤ的ブレイン・トラストの計畫によりN・R・A政策を斷行し、失業者を救済、統制復興法を實施したが、決してそれは成功せず、ユダヤ的財閥の、歐米没落の爲めに企圖せる世界大戰に對する尨大なる軍需工業によつてのみ辛くもその經濟不況を防ぎつつある。しかも現在労働問題の激化を阻止することは出来ない。

七、九ヶ國條約は破棄と同様であり、今や太平洋問題に對する四ヶ國條約を積極的に否定し、アメリカの南洋・太平洋に關する政治的經濟的勢力圏の保證を否認する。ここにアメリカの經濟は最大の不安と危険に直面し、かくてアメリカの功利的民衆は、その東洋、南洋貿易の杜絶により、莫大なる損失を蒙り、その必要なる物資は輸入せられず、棉、鐵等の輸出は激減し、アメリカ産業經濟の崩壊を必然化する。この經濟的恐慌こそ、アメリカ民衆はすべて分裂、對立し、ヤメリカ國家形式の消滅さへ豫測せられる。

時恰も、日米交渉は、アメリカの敵性を、その本然より露呈するに役立ちつつある。支那事變を眞ツ向から否定し冒瀆し來つた敵性の暴露によつて、事變は一大飛躍の段階に到達せんとする。

かくしてアメリカ及イギリスの『反省』は今や求めて不可能なるものに屬し、決定的反英米闘争を通じてのみ、大東亞の安定、秩序は期し得べき現實段階に到達した。かくてここに日本の自衛權の發動により、イギリスの法幣を否定して、圓ブロックを強化し、支那金融貿易のイギリス的支配を根本的に打破し、英米の排戦には敢然として、徹底的に非妥協的に行動せよ！ かくして日滿支一體的經濟力はアジア、南洋より英米の金融資本、權益一切をシャット・アウトし、輝やかしき勝利を獲得し得るのである。

この最後の確信を日本に自覺せしめないことが、まさに英米等の對日謀略であり、之に誘惑されて、もし百害あつて一利なき彼等との妥協をなさんか、日本は千年の恨を千載に

残すであらう。

七 アメリカのユダヤ化とその正體

『我々はすでに全アメリカの出版を支配し、影響を與へてゐる』これはニューヨークのあるユダヤ人の言葉である。現代に於ける最後の非ユダヤ的新聞王であつたハースト・コンツェルンは、今日ではユダヤ人の爲に完全に解體せんとしてゐる時、我々はユダヤ人の謀略がいまアメリカに於いては完全に實現されて居るのを知るのである。

現在書籍出版界、ニューヨークの全劇場もユダヤ人の掌握してゐるところであり、尙ラジオ放送局音楽會の興業元、劇場、俳優組合事務所、大學講師の九八パーセントがユダヤ人であり、銀行界、産業界、商業界を支配してゐるユダヤ人の名を擧げることとは無用な程

である。

合衆國の聯邦調査局は最近次の事を發表した。

『アメリカ合衆國に於ては九分毎に掠奪が、二分毎に押込みが行はれ、二分毎に自動車被盗まれ、四十分毎に殺人が、四十秒毎に竊盜が行はれる。強奪による損失額は年に約六億マークに達する。法律違反は甚だしく、之に要する合衆國の費用は毎秒一〇〇〇マークに及ぶ。』と。

またこのユダヤ世界都市が道徳的に腐敗してゐる事を示す『墮落の花園』を一見しよう。

『——大體に於てこの魔窟には合衆國の凡ゆる地方から集めて來た約三〇〇〇人の娼婦達がゐた。マンハッタン區、及びブルックリン區にある約二〇〇の娼家で娼婦達は、毎日十二時間（午前十一時から夜中の三時迄の間）毎週に六日間働かされ、各々週に一五〇ドル乃至三〇〇ドル稼がねばならない。しかも、この金額の五分の四は上前としてはねられ、

結局娼婦達は、週に僅か三〇ドル位受け取るだけである。其上彼女等は一日に二回はびつくりする程高い食事を娼家でとらせられ、捲きあげられる一方である。結局彼女等の手に残る金では生活を續けてゆく事は出來ないのである。しかもこの魔窟から首領（ユダヤ人幹部連中）が受けとる金額は年に約二四、〇〇〇、〇〇〇ドルに上ると見られてゐる。また娼婦達は事があつた場合警察の壓迫、干渉から脱れる爲に、彼女達はギヤングの裁判所會計課に辯護士料を拂ひ込んで置かねばならぬ。そして事が起ればユダヤ人辯護士は被告を無罪にする爲に活動を開始するのである。』

これがアメリカ文明の頂點たる、然も之は法律で賣淫を禁止して居るニューヨークで行はれてゐるのである。

一九〇八年當時の警視總監ゼネラル・ビンガムは『此の都市の犯罪者の五〇パーセントはユダヤ人である』と明言した。

今日、ニューヨークは實に世界の政治、經濟、金融、通信、文化、百般の中樞であり、世界の重要な出來事に對する好惡、賛否はこの都市で製作されて世界に宣傳されるのである。いまこの世界動亂に際して世界はあたかもアメリカが凡ての決定權を持つが如くに喋々する。しかもこのアメリカを動かすものこそ實に偉大なるユダヤの金權政治力であり、日々の金融市場を決定し、幾多の人命を一夜にして悶死せしめ地球全土に亘る戦争と暴動とを企圖しつつあるニューヨーク、今日このユダヤの實體を捉へずして、アメリカ問題の解明も、——『世界はどうなる？』と騒ぎ廻るのは迂遠も甚だしいといはねばならない。

ルーズヴェルト自身フリーメイソンの最高の位たる第三三階級であり、彼をめぐるユダヤ勢力は、完全に大統領を支配し、かくてルーズヴェルトはアメリカ國民の福祉のためよりも、ユダヤ金權の傀儡となつてこの代辯者となりつつあるのである。

大統領の側近者たる某ユダヤ人は、米國の非ユダヤ系市民に對して放言して曰く。

『謂ゆる言論の自由なるものが、若し我々の適當と思つて行ふことを批判乃至戒告するに於ては、諸君には最早言論の自由なるものはなくなるであらう。我々は凡ゆる批判、不正利得の告發、公的私的の虐待の上に君臨するであらう。我々の支配力は、今や諸君の言論機關、演劇、映畫、ラジオ其他の全般に及んでゐる。諸君の公表機關を巧みに左右し、諸君の聯邦準備銀行の支配者として我々の代理人を置くが故に、諸君の全金融組織の完全なる獨占をなし得る地位にある我々は、今後あらゆる法律の上にあつて、侵すべからざる民族と考へられるであらう。我々の命令に順應せざる時は、我々の思ふが儘の經濟的苦痛を與へしめる力を有する、現に我々の下僕を諸君の大統領の側近者として、我々の專制力の依つて立つ現行制度を危険に瀕せしめる如きことは些も行はざるやう監視させることすら出来るのだ。我々はこの國土をして公けに絶對的なユダヤ人の世界とするのである。もし非ユダヤ系の諸君が承知せぬなら、我々は諸君を飢えさせて承認させる。それは諸君の

共和政體と諸君自身の法律とを利用して我々の脅迫力を發動させて長びかせれば、全く平穩に暴力を用ひずして爲し得ることなのだ。何人でも我々に反對を宣するならば、自身の危険を覺悟して掛るがよい。」と。

或るわが在米同胞はアメリカは『革命の前夜』に等しいと次のやうに語つて呉れた。

『米國人の腐敗墮落振りは、完全にユダヤの三エス政策（スポーツ・シネマ・セツクス）の謀略が効を奏してゐる實例をお話しませう。

米國のハイスクール（中等學校）は男女共學で、これを見學して來た日本の有名な或る女史は「米國は男女共學によつてお互に異性を理解する訓練を施してゐるから、日本の青年男女の様に間違を起さない。日本も速かに男女共學にすべきである」と本國に皈つてまで氣焰を擧げてゐますが、その皮相な觀察には全く驚きます。何んぞ知らん米國のハイスクール内に於ては日毎に出づるチリ取一杯の〇〇〇サツクを自由の女神は何と説明するで

せう。米國にあつては結婚の條件に處女を求めてはならぬ。何ぜならば處女を求めては一生結婚出來ないと言ふのが公然の鐵則ですから。

次に軍隊の墮落です。米國軍人の殆んどは、祖國の國防に任ずると言ふ崇高な精神をもつてゐるものは殆んど居らない。陸軍の軍人に「君は何故軍人になつたのだ」と言へば必ず贅澤をする爲めと答へる。海軍の軍人に問へば「世界見物の爲め」と答へる。殊にふつてゐるのは軍人募集の方法で、軍人募集のポスターの前には頗る美人が立つてキツさせるから申込書にサインせよと言ふのです。我外務省の役人は我々に向つて、「お前達は早く米國に同化せよ。同化しないから迫害されるのだ」と言はれるのですが、「米國はこんな墮落してゐる。こんな國にどうして同化が出來よう」と云ふのが、まあ我々日本人の心意氣とでもいふのでせう。

それから米國に於て痛感したことは、日本の宣傳のだらしなさです。日本の海外報導程

無味乾燥な——まあ中學校の「修身」のやうです。そこへゆくと支那は心得たもので、アメリカ的好奇心を刺戟し、煽情するデマ宣傳は、スペクタクル映畫を見るやうに、眞實でないこともセツトで實在化して、アメリカ人の心理を巧みに掴んで、事實を幻想せしめる様に表現するので低級なアメリカ人は忽ち虚構の錯覺に迷はされ、これが一つの恐るべき流行的輿論となつて全米を風靡するのです。アメリカ人は事實の正確性程は必要ではなくたゞ一時的に昂奮を與へ、次から次へとスリルを間斷なく連続さしてくれらるること——この虚偽とスリル、これがアメリカ人の最大の享樂で、この彼等の趣味に適するものがアメリカの一般人氣を博し、支持を獲得するのです。その間の事情を支那人は最もよく知つてゐて、實に老巧に支那人的デマ性を何憚ることなく過大に放送し、アメリカ人の浮薄な心情に、支那人一流の表情技巧をもつて誇大にアピールするのです。アメリカ人はあくなき刺戟を求め、その一種の慢性的神經衰弱症は、支那的ユダヤ的毒々しさを愛好し、これに耽

溺し、陶醉するのです。

これに反して日本の親善文化使節は多愛もない、アメリカの場末の十流以下の少女歌劇であつたり、三味線、茶湯、生花の末梢的な日本趣味ばかりでは彼等が日本を侮辱するも當然です。日本がアメリカ人を尊敬さすには日本の愛國的、悲壯な忠義の英雄的行動、戦争への情熱と犠牲的意志、いかなるものにも絶對卓越せる日本精神と國體、——この日本の最も誇りとするものを、堂々と遠慮することなく表現したら、アメリカ人は『好戰的』として排撃するよりも、始めて日本人の偉大性に驚嘆し、侮蔑は一變して恐怖となり、反つて尊敬するやうになるのではないでせうか。實際アメリカ人の日本認識は、「日本に飛行機があるか」程と言ふのは最も進歩的な分子で大抵は「電氣があるか、ガスがあるか」と聞く程度です。こんなアメリカ人には下手に出れば、きつと黒人のやうに蔑視し、壓迫されるのです。日本の宣傳は、このアメリカ人の愚劣極まる心理を害せざらん様に汲々

として、甘心を買んとするから、彼等の増長心を強め、侮日排日心を強化する逆効果になるのです。まあ、アメリカがもし日本と戦争して、最初、

八 太平洋争覇戦

アメリカ陸軍は殆んど國內防備と、中、南米に對する兵力にて、それ以上の積極力を有してゐない。かくて今やアメリカ海軍は、まさに空前なる大海軍建造に着手した。

支那事變の始まる前に、蔣の空軍を指導してゐたデュエットといふ米國海軍大佐は

「日本は自國製の飛行機で我流の訓練をやつてゐる。支那は米國製や歐洲製の飛行機で、われわれの訓練を受けてゐる。空軍に關する限り勝利は支那のものだ」といつた。

かくて數年前まで『量においてもはたまた質においてもアメリカ海空軍は世界一だ』と豪語してゐた米國は、第一次上海事變の直後、支那と所謂航空密約を結んで、支那に技術と材料を惜氣もなく供給し、支那空軍の建設に着手し、約三ヶ年にして見事に所期の目的を貫徹した。

それは支那をして抗日戦争を起させ、アメリカは自ら日本の矢表に立つことなく、支那をして火中の栗を拾はせ、米國は支那との商賣でしこたま儲けると同時に、日本の發展を阻止しようとする魂膽であつた。

このアメリカの宿望は、支那事變勃發後間もなく、アメリカ海軍が輕蔑し切つてゐた、日本の海空軍によつて、ものゝ見事に完膚なきまでに叩きつけられた。慢心は退歩の先驅だ。しかるに米國海空軍士官は安價なるアメリカ第一主義による、恐るべき自負心の持主である『アメリカ海軍は未だ負けたことはない』

と彼等は揚言する。しかもこれは全アメリカの言はんと欲するところである。

思ふにアメリカ海軍は、これに従事する學者も、戰術家も、戰略家も、多く讀み、多く書き、多く辯ずることが彼等の本領であり、勝敗を決するものの如く確信してゐるらしい。彼等は日本海軍の不言實行の傳統精神を言へば恐らく噴飯一番するであらう。

しかるに日本の無敵海軍力は、日支事變の發展と共にアジア大陸制覇、海南島、新南群島の占據等により、香港、シンガポールはすでに無力と化さんとし、戦はずしてまさに太平洋、黒湖圏を全面的に、嚴然と確保しつつある。

しかるに世上俗論の横行は、數さへ多ければ、すべての戦争は、机上の統計によつて勝敗がつくかの如く錯覺すること、まさに米國の海軍士官の如き觀がある。

今アメリカは、自ら作製せる國際危機を呼號し、國民に宣傳しつつ、徒らに軍艦の數と飛行機、兵員の量のみを並べて日本威嚇をなしつつある。

ノックス海軍長官は十一月十一日の休戦記念日に次のやうに暴言した。

『——米國民は近く重大問題が決定されようとしてゐることを知らねばならぬ。これを決定すべき時は來た。現在は甚だ危険なるときである。太平洋のはるか彼岸では今や重大事態が発生する可能性がある。——』

對米政策は、今日の日本には根底的に不可能である。もし日本にして彼等と妥協せんかそれは日本が大陸政策、東亞新秩序を一切放棄した時である。

世界滿目今やこの日米折衝を注視しつつある。我々の最も監視しなければならぬことはアメリカは日本の決意の強固的なるを見るや、荏苒時日を遷延し、これを英米を含む六ヶ國會議に發展さし、外交交渉によつて日本を去勢せんと企みつつある。戦争の要諦は敵を致すか、敵から致されるかによつてきまることが、現在のドイツに見るべし。事變以來四歳切に我々に思はれることは、我國の『討ちてしまむ』の決意の缺如といふことである。

皇道の本義は「服ろはぬは斬る」にある。不純、兇惡、非法なるものは斷乎叩かねばならぬ。我々はこの悲壯なる日本の決定の時を前にして、東條首相の胸中には、すでに斷乎たる決意と信念あることを信じて疑はぬ。敵に對する妥協は、全面的敗北なるを知るべきである。いやしくも武士の爲さざるところ、——かくて來るべき太平洋爭覇は、日本國民千年の運命を決定するであらう。我等はこのために總力を擧げて決意し準備しなければならぬ。

明治大帝には、

『一日ヲ緩クスルトキハ或ハ百年ノ悔ヲ遺サン』

と仰せられた。

明治の英傑大西郷は遺訓に曰く。

『正道を踏み國を以て斃るゝの精神なくんば、外國交際は全かるべからず。彼の強大に畏

縮し、圓滑を主として、曲げて彼の意に従順する時は、輕侮を招き、好親却て破れ、終に彼の制を受くるに至らん。

國の凌辱せらるゝに當りては、假令國を以て斃るゝとも、正道を踏み義を盡すは、政府の本務なり。然るに平日金穀利財の事を議するを聞けば、如何なる英雄豪傑かと思ゆれども、一朝血の出る時に臨めば、頭を一所に集め、たゞ目前の苟安を謀るのみにして戦の一宇を恐れ、政府の本務を墜さば、これ商法支配所と言ふべきのみ。更に政府にはあらざるなり』

言辭痛烈にして、意嚴然たり。百年の後、何ぞ現代の日本を指適して餘りあるものぞ。

第五章 赤色ソ聯の興廢

一 獨ソ戰の動向

ウクライナを平定してそのまま膠着してゐた獨ソ戰も、南はドン渡河に成功して今やロストフを陥れ、ここで愈々コーカサス石油地帯へ突撃の第一歩に入つた。

同時にモスクワ攻略を目指す、ドイツ側最高責任者たるフォン・ボツク元師は、いまや二十五萬の精兵と、戦車の大集團を繰出し、中部のモスクワ包圍線は、北部カリーニンより、南部ツィラ、オガ河に至る戦線において、大進撃を開始したドイツ軍と、必死の抵抗を試みるソ聯軍との間に、目下空前の大激戦が展開されつつある。もしこの兩市を陥れ

ると、地上凍結の時機と相俟ち、モスクワ包圍も一段の進展を示すであらう。

この時ベルリン電報は

『ドイツ政府は来る廿五日の防共協定第五週年記念日にあたり、ベルリンにおいて反共列國會議を開催する』

と發表した。

それは反共諸國のボルシェヴィズム打倒の確乎たる決意を世界に再闡明するための會議であるとされ、同會議に列席する各國代表は、いま相次いでベルリンに到着しつつある。

我々はここで獨伊側から見た『共產黨のからくり。』なるものをまづゲツベルス宣傳相をして語らしめよう。

『共產黨は、賤民を煽動し、國民の暗き本能を刺戟して國家と國家の理想とに叛かせ、専ら政權の掌握につとめる。かれ等は時として他の政黨と妥協するも、これは政見について

の妥協でなく、政權を壟斷するための手段である。共産黨と妥協する政黨は獵場の狗である。狡兎盡きて良狗煮らるゝと同様に、一度目的を遂げて政權を手にすれば、共産黨は昨日の友黨を葬ることに何等の遠慮もない。今や西歐諸國の政治家は、所謂人民戦線の禍害を中和し得ると考へてゐるが、世にこれほどたよりにならないものはない。共産黨主義は劣等漢の獨裁である。共産黨は政見をとるまでは欺瞞をこととし、一度政權を得れば暴力によつてこれを支持し、決してこれを離さうとはしない。共産黨特意の壇場はプロバガンダである。かれらは虚言と阿諛あやうにより、共産黨の真相と目的とを隠蔽して各國民を陥るのだ。共産黨の父レーニンの公言するところによれば、欺瞞は許されたる手段であるのみならず、又最良の武器でもある。嘗てシヨベンハウエルはユダヤ人はうそつきうそつきの親玉であると云つた。今日共産黨とユダヤ人とが一つになつてゐるのは毫も怪しむに足らぬ。共産黨のプロバガンダは國際的であつて且侵略的であり、その目的とするところは世界の赤化

である。しかもモスクワ政權は、これがために惜し氣もなく多額の資金をまき散らす、その資金は皆ロシア國民を搾取して得たものである。共産黨はこれにより各國に於ける共産黨を支持し、世界赤化の運動に従事せしめる。蓋し各國の共産黨なるものは、モスクワ・コミンテルンの別働隊であつて、モスクワの指令によつて動くものである。かくの如き政黨を包括する國家は眞に危険千萬である。

各國の共産黨は、豊富なる資金と一流の宣傳により、共産黨主義の真相を隠蔽し、ロシアの眞事情が自國に傳はるのを防止する任務を授けられてゐる。何となればロシアの真相を暴露することは、モスクワ政府の最も畏るゝところであるからだ。共産黨の行く手には屍の山を築き、血と涙との川が流れてゐる。かれ等には人命の如きものは三文の價値もないものとされてゐる。テロ、暗殺、蠻行は共産主義革命につきもので、これによつてロシアは成行した。

凡そ共産黨の政權を得るところ、そこには共産主義の實際と矛盾があるが、かれ等はそれには頓着しない。かれ等はたゞ單に機關銃にも、を言はせるだけである。そして他の方面では巧みな宣傳によつて事實の真相を明かさない。共産主義者は相手をだまして眞の姿を見せない。しかも相手を取扱ふことが頗るうまい。例へばどこか大國の代表者がモスクワに来ると、地下鐵へ案内する。今日世界の大都市では地下鐵のないところはなく、敢て珍らしいものではないが、スターリン御自慢のものだけに來たものは感心する。次に盛んな歓迎會を催ふし、その國の國歌などを歌つてきかせると、一行はわけもなく嬉しくなつて、今迄抱いてゐた共産主義の禍害はどこへやらすつかり忘れ去り、忽ちロシア最氣になる。恐らくモスクワでは、あとで腹をかゝへて笑ひ崩れてゐることであらう。

更に特に一言せねばならぬのは、共産主義とユダヤ人との關係である。共産主義の源を開き、引きつゞきこれを維持して來たものはユダヤ人である。ロシアでは以前の支配階級

は皆一掃されてユダヤ人の獨り天下となつた。そして共産黨の争ひなるものは畢竟するにユダヤ人同志の内訌にすぎない。モスクワに於ける過般の公判も政權争奪のためにユダヤ人がユダヤ人を殺したまでである。世間ではユダヤ人は團結が強いといふが、これは大きな誤りで、ユダヤ人は互に排斥をこととする徒輩で、團結が強さうに見へるのは他國に流寓してゐる時だけで、政權を握り天下を自由になし得る時が來れば忽ちに仲間割れをなすこと、ロシアの現状が如實にこれを證明してゐる。

共産主義の目的は、人類の道德文化を破壊し、總ての國を滅亡へと陥れんとするにあるが、かくの如きも亦ユダヤ人の頭でなければ考へ出せない。共産黨の實際に行ふところは惨忍を極めてゐるが、これはユダヤ人でなければ出來ない藝當である。しかも西歐にゐるユダヤ人は、口を拭ふて世を欺き、共産黨の蠻行などは夢にも知らぬような顔をする。共産黨のプロバガンダは相手によつて術が變る。即ち或るときはラチカルであり、或る時は

中正であり全く相手次第である。或る時は宗教を崇ぶが如く、ある時は神などを馬鹿にする。何れもその時の都合によるのであつて、目的の前には手段を選ばない。かれ等には各國に聯絡のある巧妙な中央機關があつて、ボタン一つ押せば世界の共産黨を動員し得るのである。モスクワの指令を奉ずる共産黨を有する國こそ災難だ。いつかは共産主義に蝕まれて倒壊するに至るであらう——』

ルーマニヤ駐在ソ聯公使テオドロ・ブランコは、ソ聯政府の逮捕からのがれてローマに逃げこみ、現實のソ聯を暴露した手記をジョルナル・デ・イタリア紙上に發表して曰く『ソ聯には人類史上未曾有の兇惡なる奴隸制度がある。個人の自由と意思とは銃火の威嚇の下に奪はれて、農民の意志は全くコルホーズ制度で、手かせ足かせをかけられてゐる。土地も個人の所有權は喪失し、産業の各部門に於て、人々は全く鐵の笞に恐怖に戦きながら馬車馬のように督勵され、單なるバイオーク(労働能率)のために哀れな存在に過ぎない。學

理的には意見正しく見える社會主義は、ソ聯に於ては餘りにも殘酷なる資本主義の形態となつて實踐されてゐる。しかもその支配階級は百パーセントユダヤ人である。大工場、專賣局、軍需工場、鐵道、大小工業の總てはユダヤ人の掌中にある。かくてかれ等の妻子は素敵な自動車を乗り廻はし、豪華な邸宅に住み、夏はクリミヤ、コーカサスの最上の療養地で暮し、アストラカンを着て、寶石をちりばめた金指環腕環をつけ、まるでパリジェンヌのやうである。しかるに労働者は一ヶ月四百乃至五百ルーブルの賃金であり、粗末なスリッパ一足は二百乃至二百五〇ルーブルであり、最も廉い食が六乃至八ルーブルだ。しかしユダヤ共産主義の鐵則は、労働者に何等の事情をも知らさず、現制度下に盲目たらしめることに狂奔し、労働外時間も罐詰主義をとつてゐる予の知れる労働者はこれがために尙も將來に於てかれ等の生活が好轉することを空頼みにして、馬鹿になりきつてゐるものもある。五年も七年も同じものを着、肉は贅澤品として買へず、酒は殆んど飲めない。しか

もソ聯の指導者はいふ一ソ聯以外の國に自由はなく、諸外國民皆ソ聯に入國したがつてゐる」と。何たるでたらめであらう。

スターリンは科學工業航空兵器重工業の中心をモスクワ、レーニングラード、シベリヤ、ウラル極東國境、ハバロフスク、コムソモルスク等に集中した。かくてウクライナはその點モスクワの植民地たるに甘んぜなければならなくなつた。といふのは、ウクライナの民は、古き傳統を失はず、ウクライナ國民運動を持續してゐるからである。かくてウクライナの數萬の民は、この理由で殺戮され投獄された。しかもボルシエヰキは云ふ。ソ聯こそはデモクラシーの理想境であると。何たる皮肉であらう。

ソ聯にはかかる不合理に批判のメスを加へるただ一つの新聞も雑誌もない。反スターリンの聲が口から出た瞬間、その人の前に地獄の門は開かれるものと見なければならぬ。スターリンの指示する方向から一ミリでも間違つた人間は學者でも技術家でも捕縛される。

幾千の科學者、工場技師がこの世から姿を消した。内政問題の犠牲者だけでも數千に上る。外交官の犠牲も數へきれない。軍部においてもトハチエフスキー、ガマルニツク將軍などの銃殺されたのは顯著な實例だ。かかる裁判に於ては、唯一人としてこれに異存を唱へ辨明する人はない。國家を裏切つた罪によるとの一條が數萬の法令を超越し、幾萬の習慣を抹殺するのだ。予は結論する。ソ聯は現代國家から脱落した變態國であると。眞の野蠻國の實相がソ聯にある。予はソ聯に育ち、これを見、これを知つた。今確實に我良心の名において宣言する。社會主義のイデオロギイは嘘八百であると。——』

今やスターリン戰破れて、モスクワの危機は迫りつつある。スターリンは大きな誤算をした。去る五月から六月にかけ、獨軍が續々獨ソ國境に五百萬の大軍を集結しつつあつた時、モスクワでは、獨ソ不可侵條約締結の時の如く、リツベントロップ外相が、ドイツの要求を携へてのロシアへの訪問が傳へられ、モスクワはその歓迎の準備をなしつつあつた

と傳へられる。スターリンは獨軍集結をもつてヒットラー一流の威しの手であり要求を貫徹するための威嚇としか考へなかつた。

かくて當然なされるであらうドイツの要求を感知して自ら首相となつて對獨外交の矢面に立たんとした。しかもこの時ヒットラーは何等の要求も出さず、ドイツ國民すら半眞半疑の中に突如ソ聯領に嵐の如く殺到したのであつた。スターリン老いたり！しかもこの對外危機にあつて、國內の内的矛盾は、暗澹たるものがあり、スターリン政権はかの蔣介石の如く崩壊せんとする危機にある。——この苦惱と戦火の中より新たなるロシアが生れて來なければならぬ。われ等は手に汗握り、固唾をのみながら、獨ソ戦争の成行を注目しつつ、ここにしばらくロシアの歴史の跡を概観して見よう。——或はそこには次に來るべきものの大いなる暗示が見出されるやも知れない。

二 人民の自由のために

舊ロシア帝國は、内部に大きな病患を内藏せしめつつ、單にそれを強力に抑壓し乍ら、外部に發展膨脹せし大社會であつた。

ロシアの中心をなす東スラヴ民族は、太古、カルパチヤ山の東北麓に住んでゐたアジア民族であり、彼等は東北に移住して、ドニエプル流域の森林地帯に移住し、毛皮、蜂蜜等をもつて生活の條件とした。

古代のスラヴ民族は、遊放の民であり、地方自治村落（オブシチーナ）が組織され、それ等の諸村落からの代表が集つて會議する機關ウエーチエなるものが形成されてゐた。かくしてそれは大なる自治部ウオーロスチをもつて一大自治社會が存在して、それが永續し

たのがロシア農村時代の姿であつた。

しかもこれを強力に統治するロシア帝國がリユリツク（リユーリク）により始められ、九八七年ウラヂーミル帝は東ローマのギリシヤ正教を入れてこれを統一の原理となし、ロシア國教に制定したが、これとともに所謂農奴制が形成されるのであつた。

一二〇六年突如アジアの嵐となつて疾風の如く西進した成吉思汗は、今日のソヴェト・ロシアたる阿羅思^{オロス}へ侵入し、キプチャク汗國を建てそれより約二百七十餘年、蒙古族の支配下にあつた。かくてその軍事的政治的繼承により、ここにロシアは強大となるのであつた。

十六世紀後半より、ロシアの農奴制は殊に酷烈となり、農民は苦惱の餘り盛んに脱走するや、一六〇六年これを抑制する爲に法令を出し、農民の自由民たるを認めず、農民は永久に農民たることを規定して逃走の刑罰を定めた。

かくて農奴制は、一七九六年小アジア一帯からドン州、コーカサスに及んで農村の苦惱は極度に達し、ドン河、ヴォルガ河地方にあつて、農村の反亂は『人民の自由のために！』を叫んで、コサツク^{コサツク}の首領ステパン・ラーチンによつて蜂起し、モスクワ政府に反撥を翻へすに至つた。

しかもステパン・ラーチンは、時にモスクワの防禦固きを知るや、南下してコーカサス一帯を征服、更に進んでトルコからベルシヤに及んだが、この時捕虜とせるベルシヤの女王の美貌に迷ひ、彼はその雄圖空しく遂にベルシヤを征服せずして歸るのであつた。

ロシアそのものの象徴たるヴォルガ河——『ロシアの母』なるその名にふさはしく廣く、大きく、そして靜かなるヴォルガ河——緩やかな流れにのつて『ヴォルガの船唄』の悠長なるメロデー^{メロデー}が、夢の如く、涯しなく郷愁をのせてつづくあたり——いま數十艘の河船を浮べ、ラーチンが正に宿願のモスクワに進撃せんとする前夜であつた。

ラーチンは部下の兵が、『我首領はベルシヤ王女の美に迷ひてすでに戦意を喪失せり』と私語するを聞くや、ここに憤然と、彼が傍らなる美しき王女を、遂に大河の中に投げ入れるのであつた。これにより部下の士氣は大いに擧り、シムピルスク市で政府軍と激突、ラーチンの大軍は遂に利あらず大敗した。かくて彼は裏切り者の手によつて政府に渡され、モスクワに於いて焚刑に處せられるのであつた。

彼の死後百年間は、何らの大反亂もなく、農民はたゞ逃亡に次ぐ逃亡をなすのみであつた。

ペートル大帝立つや、彼は西歐主義を全面的に採用しロシアは全く近代西洋國家に轉化した。しかも、ロシア農民社會の統制は益々強大を加へ、忍びに忍んだ農民は、再びブガチヨフの亂に動搖したが、彼も亦捕へられてモスクワで四つ裂の死刑に處せられた。プーシキンの小説『土官の娘』の中には、この時代の彼の片影が、詩人の非凡なる手によつて

生きるが如く描寫されてゐる。

三 農 奴 解 放

一九世紀初頭ニコライ一世は、その即位の初めに帝政排撃の十二月黨事件起るや、彼の壓制は極度の酷烈さを加へていつた。彼は祕密探偵政策を縦横に用ひ、この祕密政治は『空色の制服』として恐怖された。

當時、すでにインテリゲンチアの社會運動は活潑となり、西歐派とスラヴ派の對立が激化された。

モスクワの西歐派には哲學的ロマン主義派なるスタンケウイチ派と、サン・シモン主義なるゲルツェン派とがあつた。殊に一八三九年以來モスクワ大學で世界歴史の講義を占め

たグラノフスキーはこの派の指導理論家であり、親友には詩人オガリョーク、文學者ツルゲーネフもこれに屬してゐた。

この團體に關してゲルツェンは

『我々の中のある者は大學の講座を擔當し、ある者は論文を書き、ある者は新聞を發行し、ある者は捕縛され、休職され、追放されるものが屢々であつた。——しかもかくも教養に富み才能を有する純潔な團體をその後に見たことがない。極めて迅速に我々は思想やニュースや知識の交換をなした。會員はすべて自分の讀んだ思想や、學んだ知識を發表した。』

かくて會員の一人の考へ出したことは、全會員の共有となつた。學界にあつても、文壇にあつても、藝術界にあつても、我々の中の何人かが知らぬ現象はなかつた。そして一切の現象は忽ち全會員に傳へられた。』

この熱團氣の中からゴーゴリは生れ、それ以後のロシア文學の大作が創造されるのであつた。

かくてツルゲーネフの『獵人日記』は、一八五〇年に農奴解放のために書かれ、異常なる感動を全ロシアに與へた。またゴンチャロフの『オプロモフ』は五七年に出で、當時の地主的インテリゲンチヤの日常性を暴露しその他の文學思想は、ロシアの社會問題を切實に分析し、その苦惱の直現であつた。

農民が地主の邸宅を焼打する事件——主人を殺害する農奴の事件、等は頻々と激發し、

一八三六年から五年の間地主殺害未遂事件は七十五件、殺害は百四十四件に上つた。

かのドストエフスキーの最大傑作『カラマゾフの兄弟』も實にこの事件に手材せるものであり、實に十九世紀末のロシアの真相であり、これは來るべきロシア革命の必然性を示すのであつた。しかもこの小説は他面西洋文明の腐敗の徹底的暴露であり、時代の惡魔の

書であり、かくて彼は一切のものを全否定するのであつた。現實の世界も、西洋文明も社會も歴史も、人間も戀愛も、——ここにトルストの『復活』において西洋をすてて遠く東方シベリヤに救ひを求めたる如く、彼も亦西洋文明の没落を力強く豫言し、そして東方よりの新しきものの出現を奇蹟的に要望するのみであつた。

——かくて十九世紀最大の作家は共に、西洋文明を痛烈に否定しつつ、アジアの黎明を心から求めて、空しくシベリヤの曠野に彷徨しつつ逝くのであつた。

——ここにインテリゲンチヤに對する壓迫は酷烈となり、農奴解放の最大指導者ゲルツェンは追放され、ツルゲーネフまたパリイに逃れ、かくて『ルージン』『バザロフ』等の典型的インテリゲンチヤの生活苦悶を描出するのであつた。

歐洲各地を放浪、ロシア農奴解放を絶叫したゲルツェンは、フランスの歴史家ミシュレに送つた手紙の中にかう書いてゐる。

「ヨーロッパ文明は今や社會主義によつて自己否定に到達した。われ／＼ロシア人（インテリゲンチヤ）は西歐文明を通過して來た。われわれは媒介者であり、醗酵素でありロシア國民と、革命されんとするヨーロッパとの間の媒介者である。而してロシアに於ける將來の人間は農民である。それはフランスに於ける將來の人間が労働者である如くに——」
かくて彼は西歐の諸都市文明に幻滅して

「いづくに行くも退屈だ。パリイでは楽しさに退屈する。ロンドンでは安全に、ローマでは壯麗に、マドリッドには窒息する如き退屈があり、ウイーンには退屈が窒息する。」

彼は實に本來の斯拉ヴ的なロマンの農民主義者であつた。——ここに我々は共產主義は新しき文化の一運動かのごとき錯覺を人々に與へるのであるが、これは即ち西洋個人主義のロシアに於ける末期的發展であり、自由主義、民主主義の變形に過ぎず、これをユダヤ人的科學主義によつて擬裝するも、それはユダヤ人の世界的霸權を確立せんとする陰謀に

外ならず、ここに共產主義の誤謬と限界を明確に示すを見るのである。

四 マルクス主義の發達

マルクス主義は近代西歐經濟獨裁における内的矛盾の自己暴露であり、——それは西洋近代社會及び文化の内面的批判と否定となつてあらわれ、その限りこの思想は甚だ力強い破壊作用を示すのであつた。かくして表面、甚だ高度の如くして難解に見えた西洋思想、西洋文明も、これを背後(裏)から見るによつて、眞の本質がその地盤より暴露され——ここに全世界の前にその限界を明確に把握せしむるのであつた。——しかもレーニン主義と言はれるものは、末期西歐金融獨占における、その必然的崩壞の行動であり——資本主義的世界大戰によつて、マルクス主義はレーニン哲學への現實的組織化をもち、第三イン

ターナショナルは、プロレタリアートの獨裁國家、ソヴィエト・ロシアを獲得し、かくて近代西歐の崩壞はロシア・マルクス主義によつて實踐され破壊されたのであつた。

さて——ロシアに嚴冬の如きニコライ一世の恐嚇政治が去ると、春の柔かき日の如き、アレキサンドル二世の恩情主義の時代がやつて來た。

帝はすでにツルゲネフの『獵人日記』等に深く感動し、自由思想の斷崖を緩和し、遂に一八六一年二月即位一週年記念日に、奴隸制度變更に關する宣言を發表し、解放された農民に關する法令を出した。

が、農奴解放は名のみにて、農民の幻滅は甚しかつた。

時に一八六六年四月アレキサンドル二世がネワ河畔のレイトニイ・サード(夏の庭園)を逍遙して、冬宮に歸らんとする時であつた。カラコーゾフは帝を狙撃せんとしていままさにピストルの引金に手をかけた瞬間、傍の百姓が反射的に彼の右手を打ち、ピストルは

發せられたが銃丸は外れて帝は危難をまぬがれたが、これ以來、彼の温情主義は一變して、猛烈なる彈壓政治となり、言論はすべて抑壓されるのであつた。

社會思想を抱いてゐたインテリゲンチアは、殆んど海外に亡命した。

第一インターナショナル派のバクーニンも、チユーリツヒにあつて、アナキズムをもつて『民衆の中へ!』を強張した。

彼ははじめマルクスの指導する『國際労働組合』に加入したが、マルクスのプロレタリアート獨裁に反して、農村を基礎とし、兩者の間に激しい闘争がつづけられた。

遂に第一インターナショナル派は分裂し、バクーニン派の中から出たアナキズムの最大の指導者クロボトキンは、青年層の中に最大の力を有つてゐたが、彼はバクーニンの否定的破壊主義に反して、相互扶助による共產社會の建設を求めたのであつた。

またバクーニン派からマルクス主義に轉向したブレハーノフはロシア・マルキシズムの

父と言はれ、『労働解放團』を組織し、一八七〇年代以後、ロシア社會運動において彼の指導は驚くべく強力であつた。

十九世紀の八十年代に於いて、ロシアの資本主義は大いに發展し、そのため各工場には大規模なストライキが頻發し——その嵐の如き労働大衆の叫びを統一したのは若きマルキスト時代のブレハーノフの姿であつた。

彼はロシアに於けるプロレタリアートを正しく認識した。彼の業績は、彼のこの透徹した理論研究によるものであり、——幼稚なロシアの社會理論に、辯證法的基础づけをなすことによつて、ロシアのマルクス主義が、始めて其本質を把握し實踐し得たのであつた。

彼は世界大戰の時には第二インターナショナルの如く愛國主義から政府を支持し、一九一七年ソヴェート革命となり、彼は直ちに歸國したが、レーニン等と對立して、ソヴェート政府から排撃され、ロシアの未來が限りなく暗澹と豫想される孤獨の中に、當時獨軍の

占領してゐた、フィンランドにあつて、痛ましい晩年の死を迎へたのであつた。

五 ロシア革命

一九〇四年日露戦争は勃發した。

日本が三國干渉によつて遼東半島を還附するや、ロシアは北滿に鐵道敷設權を握り、更に旅順、大連の租借權を公然と奪取した。

しかもロシアの魔手は愈々朝鮮にまで伸び、龍巖浦の租借を要求した。我極東の生命線——日本の運命はまさに危険の最大なるものであつた。われに對し五十倍の國土、三倍の人口、五倍の兵力を有する世界最強の陸軍國に對し、今や國運を賭しても争はねばならぬ。一刻遅れば、それだけ危機は増大する。十年の臥薪嘗膽は、明治三十七年二月六日

の國交斷絶の宣言となつた。

全世界は日本の滅亡を豫想した。時に歐洲の侵略は全アジアをまさに分割せんとする危機にあつた。白人は遂に全地球を完全に征服せんとするか？ これぞ國運を賭した最後の一大決戦であつた。

日露戦争の意義を正しく認識し得ざるものは、眞の世界革命家ではあり得ない。歐洲大戦——ソヴェート革命——シベリヤ出兵——共產主義の范濫——滿洲事變——支那事變——張鼓峰事件——ノモンハン事件——これらは日露戦争より引かれたる、世界史變革の脈々として續く一つの糸である。日露戦争によつて、始めて有色人種は白人に對する勝利を示し、數世紀間、壓制と拘束の鐵鎖の中に植民地化され、奴隸化された、アジア民族の解放と、有色人種の全面的覺醒はこの日露戦争によつてもたらされたのであつた。

ここに二十世紀の初頭、近代世界史はヨーロッパ白色人種の世界史たることをやめ、眞

の世界史の第一頁を繰りひろげた。實に日露戦争こそ白人侵略の最後の終曲であり、同時に日本による世界人類解放の輝しき序曲であつた。

然らばこの日露戦争にあつて、ロシアの國內はいかなる變化をなしつつあつたであらうか。

一九〇四年日露戦争は、ロシア社會の内部的矛盾を俄かに大にし、この年の夏には、西部都市の失業労働者は、全労働者の五〇パーセントに上つた。

かくて至るところ社會的不満は勃發し、内相ブレイヴェは七月十五日モスクワの大學生サゾーノフなる一青年に暗殺された。

このことはブレイヴェの自由主義に對する寛大なる懷柔政策の失敗なりとして、極度の彈壓政策の斷行となつた。しかも社會的困窮はいよいよ激化し、今や嚴冬の時期を迎へんとして、生活は逼迫し遂に一九〇五年一月九日ペテルブルグ市にプロレタリアートの示威

運動が行はれた。ペテルブルグの罷業労働者は實に十四萬に上つた。

時恰も東方日本は連戦連勝によつて、攻勢愈々強化し、ロシア軍は連戦連敗の悲境にあつた。このことはロシア國民の不満を益々増大し、社會狀勢は日に日に險惡を加へて行つた。今や直接皇帝に直訴して労働者の苦痛と、その主張する正義を言上せんと決意するのであつた。

上奏文は各支部で讀み上げられ、全労働者はこれに賛同し、一月九日、日曜日をして人民の衷情を訴へんとするのであつた。

一月九日——その日は雪のチラチラ降る間から、時々、ふい太陽が冷たく人間の悲愴な顔を仄かに照らして、廣場は灰色の憂鬱に閉されて、來るべき悲劇を豫期するもの如く陰慘なる光景に満たされてゐた。

十一部の支部は早朝から續々と冬宮の廣場に進み、この労働者群の中には、多數の學

生、社會黨員も参加した。

正午には一大群衆は廣場を埋め、ロシア労働協會々長ガーボン司祭は、ナルワ門より僧服の正装をなし、手に十字架を捧げ、二十萬の大群衆の先頭に立つて進んだ。

この時ペテルブルグの市中には、すでに戒嚴令が布かれ、銃劍はきらめき、兵士は右横左横して、暗擔たる状態であつた。

突如！労働者の一隊は軍隊によつて冬宮に赴くことを妨げられ、彼等は遂に軍需工業を占據し、檄文を撒布した。いつのまにか、どこからともなく血の如き赤旗が翻つてゐた。

ああ！今やロシアの大軍隊はこの労働者の大群に向つて轟然と發砲した。
白雪は點々と眞紅の生々しき血潮に色彩られ、聽て河の如く流れ出すのであつた。累々たる屍體は、黒々と冬宮の廣場を埋めた。——この悲報一度び全國に飛ぶや、ロシア全土の労働者の反抗となり、ここに革命は最早必至の如く見えるのであつた。ポーランド、コ

ーカサスの國境には反亂が起きた。戦闘艦ボテムキン號の乗組水兵は一舉に反軍と化した。しかもロシア政府には日露戦争の敗報相次いで來り、——ここにこの國內反亂を押しんために二月十八日全國民に議會開催を誓約して、人心を懐柔せんとした。

これは一時ロシアの國內動亂を靜め、レーニン派の革命運動は失敗に歸した。

しかもこれが挫折したのは日露戦争において、その休戦が成立したためであり、もしその東部戦線が持續されたならば、ロシア革命は一九一七年を待たずして、この時すでに斷行されてゐたであらう。

六 共産ロシアの出現

ブレハーノフと共に十九世紀の最も困難な時代を、マルキシズムをもつて闘争したもの

はレーニンであつた。

彼は一九〇〇年十二月ドイツのミュンヘンでロシア社会主義労働党中央委員の機關紙、「イスクラ」(火花)を發刊、一九〇三年ブレハーノフと分離、彼はボルシェヴィキの主宰者となり、常に國外にあつて大衆を指導した。かくて世界大戰が發展して、一九一七年二月ロシアにケレンスキの革命勃發するや、ドイツ國內を通過し、同年十月ケレンスキを排撃、ここにプロレタリア獨裁のソヴェート政府を樹立した。カメーネフ、ジノヴィエフ、トロツキー等はこの革命の最大指導者であつて、彼はその後、ソヴェート聯邦の確立に努力し、新經濟政策を布き過勞の爲、一九二四年一月モスクワに近い、ゴールキ村で多難なるロシアを永久に去つた。——(ここに第三インターの危機始まる。)

彼の理論は明快であり、『經驗批判論』において彼の唯物辯證法哲學を確立し、『ロシアに於ける資本主義の發達』はその經濟理論の基礎となり、彼は常に時代の現實に敏感であ

り、これが革命の成功をなした最大の理由であつた。

レーニン死後、ソヴェート革命は、プロレタリア獨裁の二十年間を経過し、その第一次第二次、第三次五ヶ年計畫が發表され、レーニンの——農村電化トラクターの大量使用

——大水力發電所——大運河等——プロレタリア社會建設が盛んに行はれつつある一方、黨首脳部にあつては、異常なる内部分裂を深刻に實現するのであつた。

今やロシアの中央委員は、トロツキー、ジノヴィエフ、カメーネフ、スターリン、ルイコフ、ブハーリン等によつて結成されたが、遂にトロツキーとスターリンの尖鋭なる對立となり、一九二五年トロツキーはスターリン、ジノヴィエフ、カメーネフの三頭結束によつて、赤軍の統制權を奪はれ、さらに一九二七年にはコミンテルン、及ロシア共産黨中央委員から除名され、小アジアに流刑、二九年遂にロシア本國を追放されて、諸外國を轉々放浪する苦惱の中に絶命した。

しかもトロツキーの赤軍編成時代以來の勢力は、牢固として容易に抜くことを得ず、反スターリン戦術が盛んに計畫され、遂に一九三四年には大規模な反スターリン派のクーデターが斷行されんとし、遂にその清掃のためにキーロフ條令が制定された。——以來、ジノヴィエフ、カメネフのソヴェートの元勳を銃殺し、これよりスターリンの懐愴たる肅清の嵐が全世界を驚倒せしめたのであつた。

七 スターリンの方向

スターリンはトロツキー派の勢力を驅使する爲に『世界革命主義』を否定し、ここにスターリン獨裁制を確立した。この間の幾多の清黨工作は、すべてマルクス・レーニン以來の世界革命の方向に進まんとするトロツキー派に對するものであつた。

東西の兩正面作戦の主動者トハチエフスキー等を始めとする恐るべき大量の內的掃蕩は、すべてスターリン獨裁の一國ソヴェート確立のための犠牲であつた。

しかも今や赤軍の弱體化と、内部抗爭對立の激化は、日獨伊同盟の強化と共に東には支那赤化に失敗し、西にはドイツとの死闘によるスターリン戦の敗退となり、モスクワはドイツ軍の猛攻の前に最大の危機に直面しつつある。赤軍は果してモスクワを死守し得るか。早くもスターリン遷都説が話題に上らんとす。

今次支那事變に於いて、ソ聯は支那においては民族解放、救國を名とする、赤化戦線を構成し、日本の大陸政策を帝國主義的侵略として排撃、一方英米ソの人民戦線的協力をもつて、對日共同戦線を張り、ひそかに日本の消耗戦の深刻化を計り、さらにコミンテルンによる反國家的唯物赤化思想をもつて、自由主義、民主主義と協力しつつ、我が日本の根本原理を破壊せんと策動するのであつた。

しかもソ聯は植民地民族の非合理性を、プロレタリア的非合理性の中に塗り潰し、アジア文化國の解體と侵略を敢行するのみならず、アジア文化の何ものたるやも知らずして、アジアの主體たらんとする欺瞞性を有し、今や却つて英米の援助の蔭に蠢動するのみとなつた。

しからば、このボルシエヴィズムは、如何にしてこれを根絶し、スターリン的變革獨裁の下に、ソ聯内部の封鎖によつて、世界狀勢に對する盲目化に呻吟する農奴的ロシア人は、いかにしてこれを救ふべきであらうか。

これに對しては

1 ソ聯が極東に使用し得る兵力に相當するものを備へ、大陸兵備の完全と共に、全軍の補給に必要な生産能力を大陸に保持する。

2 支那西北角における赤軍の徹底的清掃をなし、日本の進出は、シベリア・ロシアの

中央部に對し、最も効果的なルートを開くこと。シベリアは本來アジア人のものであり、アジア・ロシアをしてアジア人のものたらしめる。

3 ソ聯内部の重大なる矛盾はロシアはそれ自體、廣大なる農業生産國であるに拘らず、小數のプロレタリアートのために大部分の人民は悲惨なる壓迫の下に苦しみ、ロシア社會主義はロシア人の九〇パーセントを貧農とし、まさに一部の獨裁者と奴隸とによつて組織された舊ロシア社會制の復活である。しかもコミンテルンの唯物的反宗教政策は、ソ聯の反回教政策となり、これに對し——外蒙、シベリア、新疆、青海、中央アジア全般に亘る全回教徒を背後より支援し、猛然たる反共戦線を結成する。

しかもソ聯は、まさに迫りつつある世界戦争を契機として、一舉に世界赤化を執行せんとする、恐るべきコミンテルンの眞に世界破滅の暗躍に、今や全面的に方向を轉換せんとしつつあるかに見らるるのである。

即ち戦争を通じて革命へ！ 外戦をして内戦へ轉ぜしめんとする。今や自らの最後の死闘の前にあつて、世界革命による復活を計らんとする。

しかも、共産ボルシェヴィズムとは近代西歐崩壊の最も大なる未期的現象であり、民主主義、個人主義、自由主義の西歐諸國は、遂にすべてこの赤化的徴候を示すを見る時、眞に世界平和のため、人道のために、共産ロシアを抹殺することこそ、我日本に與へられたる崇高なる使命である。

スターリンは何處に行くか？ これは目下の彼の遷都問題よりも日本國民にとつて重大でなければならぬ。我々は英米ユダヤ金權の策動は、ソ聯を藥籠中のものとなし若し、今日本が或地點に南進するとせば、日本兵力の分散による間隙地帯に、今尙五〇〇萬の兵力を有する蔣介石を進出さすであらう。ここに印度への方向を遮斷されたソ聯は、死地回生の地を求めて東方に出口を求め、かくてコミンテルンの思想戦は、支那及日本内部に、

英米的ユダヤの第五列と共に、赤化思想を蔓延し、日本内部の崩壊をはかるであらう。この時日本にして寸隙たりとも彼等の乗ずる隙あらんか、米國の大艦隊はここに初めて、日本攻略の攻勢に出づるであらう。——この日本世界戦争の性格はかくて、四方面作戦の最大の危機の中に、日本國民の決意を要求しつつ展開されるを豫感するのである。——この爲にこそ我々は一億一丸の燃ゆる如き決意を要求するのである。——しかも我々は日本戦争の爲に最も必要な物資を充足するために、物資の最も豊なる南方——佛印、蘭印、英印南洋諸島一帯に對する進展を、その戦略の根本方針よりして、絶對至上命令とするのである。

第六章 ユダヤ金權の解剖

一 ユダヤの日本革命

かつてロイド・ジョーヂは

「世界に於けるユダヤ人とマツソン秘密結社のことをしらすして、一國の總理大臣たる資格も、外務大臣たる資格もないのである」

といつた。

まことに「革命といふ言葉は我々が發明したのだ」とユダヤ人自ら公言する如く、「革命のある所必らずユダヤ人あり、ユダヤ人ある所必ず王冠が落ちる」といはれ、彼等は各

國に「國家内の國家」を組織しつつ、世界の金の三分の二はユダヤ財閥の金庫に喰り、(アメリカの某所に秘かに埋めてあるともいはれる、世界言論機關の九十パーセントはユダヤ統制下にあり、現代世界を動かしてゐる指導者、——アメリカのルーズヴェルトはフリー・メーソンの最大階級たる三十三階級を有つ結社員であり、彼を圍繞するブレーン・トラストはすべてアメリカに國籍を有つユダヤ人であり、「ユダヤの終生の友」と云はれる英首相チャーチルの下には、ユダヤ人イーデン外相あり、ホーアベリシヤ陸相あり、今東亞に暗躍中のダフ・クーパーあり、ソ聯にはスターリンの義兄ユダヤ人カガノウキツチ閣と、世界赤化に重要な役割を演じてゐるユダヤ人リトヴィノフあり、スターリンは今やユダヤ人の傀儡の如き觀を呈し、尙國際聯盟首脳部は全くユダヤ人によつて占められ、國際秘密結社フリー・メーソンは全世界にその秘密力の根を張つてゐる。三民主義の權化マツソン結社員孫文はユダヤ人により「孔子よりも偉大なる支那第一の偉人である」と宣傳さ

れ、その遺髪を繼ぐ蔣介石またマソンの結社員である。

しかもフランス革命にあつて、佛王ルイ・フヒリツプの體に手を下して死刑を行つたものは青年ユダヤ人サムソンであり、かつて大ナポレオンはフリーメイソンを利用して却つて彼等に操られ、第一次歐洲大戰發火の原動力となつた埃國皇儲暗殺事件の當の下手人はユダヤ人ガブリロ・プリンチツプであり、(カイゼル・ウイヘルム二世またナポレオンの前轡を踏んだ。) ロシア革命において露國皇帝初め皇太子に至るまで一族十數名を盡ろしにした過激派の十一名はすべてユダヤ人であつた。

我日本に於てさへかの大地震災と共に日本上下を震駭せしめた日本共産黨事件、幸徳秋水の反逆思想は渡米中左傾ユダヤ人の帝位覆滅思想に感化されたのであり、第二の大逆灘波大助の大不敬事件は、改造誌上に掲載された河上肇の『斷片』露國のテロ紹介文を読んで、その實行手段を思ひついたのであつた。

近くは歐洲に於いて英國新聞の所謂『悲しむべき出来事、シンブソン夫人事件』——彼女はシンブソン・アーネストと結婚するまでに數度結婚した、いはゞ不倫の戀の經驗者であつた。——事件は、利用出来る者は何人によらず、最後の瞬間まで利用し盡すユダヤの政策であり、かゝる高貴なる人々までも操る巧妙にして、偉大なる威力を發揮しつつあるを知らねばならぬ。——シンブソン事件以前には、王冠をかけた空前の戀愛として宣傳されたルーミアニア國王カロール二世と、ユダヤ女ルベスコ夫人の灼熱の戀物語があつた。ゲツベルス宣傳相は

『今やユダヤ人は歐洲各國の文化を潰滅に導き、國際ユダヤ帝國建設の爲めあらゆる手段と方法を盡して蠢動しつつある』
と喝破した。

いまやユダヤ人の世界的勢力を閑却して、社會萬般の世界相を論ずるのは、今日におい

ては、恰も群盲の巨象を摩して之を評するに等しいのである。

『西歐の没落』を自らに實證せる、かの第一次世界大戦直後のことであつた。

當時外國武官であり、ユダヤ問題の研究者たりし日本人が、歸國を前にして時の宰相ロイド・ジョージに會見した時のことである。

彼は話題が一度ユダヤ問題に移ると次の如く述べた。

『成程英國は大戦には勝つたが、我大英帝國も最早没落の運命をまぬかれぬ段階に到達してゐる。それは我國の指導的重要ポストは、いつの間にか——英國民が氣付いた時は最早どうすることも出来ない程、ユダヤ人が根を張り、遂にユダヤ人によつて何もかも占められてしまつたからだ。かくては最早英國に前途の光明はない。しかもユダヤの勢力は、この大戦を契機としてロンドンからアメリカに集注した。と言つて、彼等の目標がアメリカにあるからではない。歐米はすでにユダヤ金權によつて、身動きの出来ないやうに制御されてし

まつてゐるからだ。——いま彼等の目標は明白に日本に向つてゐる。——すでに彼等は勝算あるものの如く行動を開始した。——彼等にとつても今や日本が最後の目的物である。

日本を完全にユダヤ化して國內崩壊に導き得れば、彼等の二千年夢みてゐた、ユダヤ選民族による世界統治が實現する時だと信じてゐる。その時期はもう近い。——彼等はすでに其の時の世界統治者となるダビテの未裔をひそかに某所に養成しつつ、今世界一流の各方面の大學者を側近につけて、世界統治者たるの勉強を授けてゐるのだ。日本もやがてユダヤの怖ろしさを骨の鳴るまで知らされるであらう』

と云つて白い口髭をふるはしながら嘆息した。

應訪の日本人武官は、心持ち色蒼さめ乍ら、かう訊ねた。

『我國には一天萬乗の大君と、——陛下の赤子たる忠誠勇武の日本國民がある。——若しユダヤ金權が日本に魔手をのばすとしても、今迄彼等が歐洲で用ひて來たやうな謀略では

到底我國を破壊することは出来まい。とすれば、彼等には何にか新しい武器が……」

と言ひかけると、

『そこだ！』

と首相は我意を得たとばかり、莞爾としてかう續けた。

『君の言ふ通り、日本人は人種も違ひ、顔の色も違ふ。いかなるユダヤ人と言へども、歐米にては、或はアメリカ人となり或はイギリス人となり、又はフランス人、ドイツ人、さらにロシア人となることも出来る。否現在彼等はさうした國籍を利用して表面を偽装してゐるのだ。ユダヤの裏面を知らない人々は、彼を單にアメリカ人と思ひ、イギリス人として偽瞞される。——が、日本だけにはかかる方法では喰ひ入ることは出来ない。』

と、言葉をきつて彼は暫く考へてゐたが、聽て大きく一人でうなづく

『今、予は明瞭君に予言して置かう。——彼等の日本における謀略は、まづ日本國民の頭

から、天皇陛下の四字を無くすることにある。即ち、天皇觀をくつがへすことだ。かくして若し日本人の頭を、彼等の作り上げた新しき、天皇觀によつて骨抜きにした時、其時こそ日本は完全にユダヤの謀略に毒された時であらう。そして知識文化の名をもつてユダヤ唯物思想の阿片に、日本國民全體が中毒した時、それは最早日本の死命を制する致命傷であり、勞せずして、——血を見ずして——戦はずして——彼等は、日本活殺の魔力を自らの手に握り得るのである。』と……

——もしも諸君が、靜かに目を閉ぢて映畫に映し見る如く、大正初期以來の日本の姿を、その腦裡に描き出されるならば、この言葉の何を意味するかを、容易に理解されるであらう。

即ち大正時代に入つた——社會思想、デモクラシー、自由主義思想の扶植、——かくしてユダヤの惜みなく撒き散らす黄金の魔力は、遂に日本の言論機關、學界、政界、財界の

上層部をユダヤ金權の虜となし、——これにより全宣傳機關を動員して、夥しい我が國の青年達は、彼等の質造する大なる贖金の洪水のうに溺死していつた。

かくて昭和時代に入るや、ロンドン軍縮會議(恥づべきキャツスル事件を想起せよ)——滿洲上海兩事件當時のユダヤ國際聯盟による日本の孤立、國民思想の混亂、軍民離間策動、政治家、外交官、閥界の巨頭の一部には、ユダヤ系フリー・メイソンの魔手に踊る者すら現出し、遂に惡思想の浸潤は、東大法學部の主要分子を思想的にユダヤ化し、ナチスに追はれたハンス・ケルゼンの國際法上位説『天皇は第一次的には國際法團體の機關なり』の解釋の如く、——ゲオルグ・イエリネットク的一般國家學は、美濃部達吉博士等の、——まさに萬邦無比の我國體を破壊せんとする——天皇機關説となり、それは白晝公然と横行する時代を現出した。かくして人民戰線思想の瀰漫は過般の帝大肅正問題を生み、東大經濟學部の河合榮治郎教授の如きは、特筆すべき外來思想陶醉者であり、——かくて教授

助教授十七名と前途有爲の學生二千六百餘名の犠牲者を出す悲しむべき事件を發生した。一方ユダヤ人の力を入れる國際的インテリゲンチヤの組織は、日本の知識階級に最も迎合され、ここにフリーメイソンの外廓機關を生み日本國際ロータリー俱樂部となり、日本人を巧みに操つて諜報機關國內輿論攪亂に資し、(真正直にも米國本部からの指令を受けて、米國の爲めに情報を集めた日本人もあつた)——しかもこの米國のマソン結社員の提唱によるロータリー俱樂部には、日本にても上流階級、資産階級の人々が好んで入會し却つて外人と交際する機關として社會的に名譽の如く思はしむる一種の社交機關となつたのである。——かくて今次近衛内閣の辭職についても、日本國民はその當日に至るまでこれを感じせざるに反し、ユダヤ人の經營する某外國通信は、すでに一ヶ月前、しかも時間をも明示して之を報じてゐた事實を、我等はいかに考へるべきであらうか? さらに日本國民に對するユダヤの三S政策(セックス、スクリーン、スポーツ)は、青年男女の墮落誘惑となり、所謂『文

『明開化』制度によるユダヤ化は、両親への反抗、道德破壊、家庭生活否認、自由戀愛——これ等は和製西洋人の如き『新しき女』なるものを作り、——男女關係の秘密を魅力的に露骨に實物教育し、米國リンゼー判事の『試験結婚』は結婚前の肉體的交渉を懲憑して、處性破壊による家族制度の紊亂を目的とし、先進文化國と言はれるフランス首相（ユダヤ人）レオン・ブルムは『幸福なる結婚』の著書を發表して（我國では無節操な婦人公論が掲載して發禁處分となつた）——彼は結婚前の處女性放棄を獎勵し、その爲には近親間の交渉さへ認るをいふのであり、これ等惡の華の誘惑は、日本國內の社會秩序の攪亂を目的とするものであつた。——かのアンドレ・モオロアの『フランス破れたり』の作品は、——その底にはユダヤ人としての彼の救ひ難いニヒリズムの反戰的否定觀が色こく覗はれるにもかゝらず——フランスの没落が、その頹廢性において内部的に必然的であつたかを物語るものである。

『大衆が考へることのないやうにする爲に、彼等の頭を遊戯や、娛樂により、憤懣と遊惑により、健全なる思索から外らさん』とするユダヤの政策は、ユダヤ人によつて見せられる我國の外國映畫の影響に見らるる如く、また外國映畫の燒直しの多き日本映畫、日本レヴュー（レヴューのサイン狂を産出する東寶の如きは、建物までユダヤ式建築である）——によつて、ユダヤの個人主義、拜金主義、淳風美俗破壊宣傳に協力する、幾多の植民地的人間を製造し、それはスポーツにも於いても、純眞なるべき青年を英雄に作り上げ、其人氣を利用して惡風を蔓延まことさせんとするのであつた。——我々には最早これ以上尙ユダヤ問題を具體的に説明することは許されない。しかし乍ら特に日本國民の注意を喚起したいことは、ユダヤ人は日本人を輕蔑しきつて公然とかう言つてゐることである。

『最近日本に於いて、漸くユダヤ問題が論じられるのであるが、我々はこれについては安心しきつてゐる。日本國內にては、いまだ一般大衆はこれについて盲目にされてゐるし、

爲政者も單に我々を全然問題にしてゐない連中か、或は我々を利用せんと簡單に考へてゐるもの、また極度に我々を恐怖してゐるもの、——他は自ら我々の手足となつて踊る連中に過ぎない。皆彼等は一様に色盲であり、何等我々の核心に觸れてゐるものはない。が、若し一度び、我々の考へてゐることがこの國で行使されない時は、我々は必要に應じて幾多のテロ手段にも訴へることが出来るのである。——いづれにせよ、我々は現在の日本の現状にては怖るべき何者も存在してゐない。』と。

一一 ユダヤ問題とは如何なることか

ユダヤ精神の全眞髓と言はれるタルムード（ユダヤ聖書）の中には

1. 神より生れたるは唯だユダヤ人のみ、其他の人類は惡魔の子なり。

2. 永久に生存する價值あるものは、獨りユダヤ人のみにして、他の人類は驢馬にも如かず。

3. ユダヤ人は人類と名づくる權利あるも、不淨の神より生じたる非ユダヤ人は豚と命名せんのみ。

4. エホバ（上帝）は、非ユダヤ人を憎み給ふ程、ロバや犬の如きものを憎み給はず。

5. 非ユダヤ人が善事を行ひ、慈善を施さば、之を罪と認め彼等を呪ふべし、之れ彼等は誇らんが爲めにかかる行ひを爲すが故なり。

6. 我等はいかなる援助も非ユダヤ人に乞ふべからず。我等の利益の爲には彼等に害を與ふべし。非ユダヤ人は地上に在る幸福を占むる權利なし。なぜならば彼等は唯だ動物なればなり。動物を放逐し殺戮することく、我等は非ユダヤ人を逐ひ之を殺し、又彼等の財物を利用し得るものなり。即ちユダヤ人ならざるものの所有物は我等の紛失したる

ものにして、實際の所有者はユダヤ人なるが故に、ユダヤ人は先づ第一に之を所有せざるべからず。

7. もし非ユダヤ人が、ユダヤ人より些細なるものを盗むときは、之を死刑に處するは當然なり。然れどもユダヤ人は欲する儘に非ユダヤ人の所有物を奪ふも自由なり。是れ『汝の隣人に惡を施す勿れ』とあるも、特に『非ユダヤ人に惡を施す勿れ』と明記しあらざればなり。もし非ユダヤ人にして穴に墜つるものあるも、之を引きあぐるに及ばず。其の穴に階梯あらば之を取除けよ。もし傍らに石あらば、拾ひてこれを穴に投ぜよ。

8. 非ユダヤ人の財産を管理することはユダヤ人の權利なり。同じくユダヤ人は非ユダヤ人を殺生する權利を有す。『殺害する勿れ』とは、實は希來の子なるユダヤ人を指すものにして非ユダヤ人を意味するものにあらず。而してこれを行ふには、責任上の危険尠なき時を好しとす。非ユダヤ人を殺害するには、彼等の中最も高等なるものを選ぶべし。

9. 非ユダヤ人の生命は我等の掌中にあり。特に彼等の黄金は我等の所有物なり。

10. 非ユダヤ人の血を流すものは、エホバの神に生贖を捧ぐる者なり。

11. 故意にユダヤ人を殺害せる非ユダヤ人は恰も全世界を滅亡せしめたる如き罪あり。

かくして彼等は所謂選民主義をとらへ政教一致の主義をとり、ユダヤ民族だけが上帝の特寵を受けてゐるとなすのであり、その本國の没落以後は全世界を家として、國際主義を奉じ、一切の國際關係、國際事業、國際活動、國際投資は、悉くユダヤ人の利害を中心としたものであつた。かくて、ユダヤの世界征服は、必然に全世界の經濟獨占の線に進み、ユダヤ財閥は世界最大の超國家的金權となつた。かくしてこの世界最大の金力を擁して、全世界の生産者と、全世界の消費者の中間に立つて、需要供給を操り、相場を操り、爲替を操りつつ、全世界の生産者と全世界の消費者とを苦しめてゐるのである。其上、彼等は

黄金をもつて言論出版界を支配し、彼等の不利益と目さるる述作は、闇から闇へと消滅する。——同時に歐米の出版界を支配してゐる彼等は、勝手氣儘な宣傳を自由に行ひ、積極的に捏造された逆宣傳を行ふも、あやしむには足りないのである。

しかも今日、全世界の金融を支配し、石油を支配し、金銀銅^銅其他の礦物を支配し、通信機關、娛樂機關、言論機關、及、各種の國際的機關、と事業は、彼等が國際聯盟を完全に支配してゐる如く支配してゐる時、彼等の世界征服、國際陰謀は決して夢物語りではなく（日本が存在しなかつたならば）或は實現可能性の問題なのである。

かくて彼等の活動はその兩建主義により、反對と賛成、否定と肯定、親善と排斥、戦争と平和、共產革命主義と資本主義——の實行により、巧みに外間の耳目を欺き、敵の裏を搔く特殊の型を用ひてゐるのである。かくして國々の内部に分裂を導き、不和を起し、革命を發生させることを目的とし、或は思想をもつてこの方向に導き、社會の上層と下層、

政府と民間、資本と労働とを對立さし、兩者の思想を極端な一方向に傾けしめるのである。——これは和を以て貴しとなす我國とは全く反對の立場をとるものである。かくて闘争の爲めの闘争、思想の爲めの思想、學問の爲めの學問、科學の爲めの科學、となり、人間の喜ぶ極端と誇張を利用して、經濟上の労働價值説、唯物論、反宗教といふ極端なものを説き立て、——かくて全宣傳機關を擧げてこれを宣傳するのである。

このためには、彼等はその宗教よりして金權主義であり、金力の信者である。ユダヤの異民^{ユダヤ}征服に曰く『黄金を所有すること、その黄金はあらゆるものを購求することが出来る。』と信じてゐる。かくて金力萬能の標準は、一切のものを金力の一點から解決せんとし、金力以上の一切の力、個人の信仰、國家の權力、家族の團結の一切を破壊せんと工作する。ここに『大勢力の新聞紙』の獲得となり、言論機關を支配し、自由主義、社會主義の鼓吹となり、現状打破を叫び、白を黒にし、善を惡に、物質を精神の上といふ風に、價値の

顛倒を試みて、時代思想の混亂を招来せんとする。

革命は戦争であり、戦争は革命である。彼等は戦争を作成する。國籍なき彼等には戦争は一向に痛傷を感じないものであり、これにより、自由に大膽に、巧みに軍需品、或は禁制品を扱ひ、その賣買によつて莫大な利益を得るのである。かくて戦争が終れば、貴族に列せられ、榮爵は授けられ、議員となり、大學教授となり、大都市の市長となること思ひのまゝである。——しかも戦後ともなれば、各國共戦後の復興事業が熾んになり、反面國庫は窮乏を告げてゐるので、國債の發行によつて、即ち割引と價格の釣上げによつて、巨利を博する。戦争は必然に、物價の暴動を誘起し、通貨の膨脹を發生、物資の動きに激變を見せる。この場合最も有利の地位に立つものはユダヤ人であり、その國際的活動は殆ど獨占的な勢力を揮ふに至るのである。——かくてユダヤ人は常に革命的であり、戦争挑發的であり、彼等は人間活動の殆んど如何なる分野に於いても革命的である。革命を熱心に

鼓吹し、その革命の種類如何を問はず、その革命の成功、不成功に拘らず、革命による生活上、思想上の動搖は、常に彼等を利益するのである。

ユダヤ學の奥義書『タルムード』には

『戦争は、その参加の時よりも、媾和の際に注意せよ。戦争の眞の勝敗は、媾和會議に於て決定されるものなり』と書いてあり、彼等は機會ある毎にこれを實行して來てゐるのである。

かくして彼等は『戦争』を右手に掲げては、超大資本家としてその金權を益々増大し、『平和』の花束を左手に捧げては『戦争否定』と反戦思想を、自由、平等、平和、人道の名に於いて鼓吹し、裏に廻つては、社會主義、無政府主義、共產主義を縦横無盡に宣傳して、革命、而して戦争への種を播くのである。

かくて彼等の人生觀は、人間性の惡である、少くとも人間を惡と假定して、その上に一

切の工作を進める。——ユダヤ人問題は全世界に亘つて、人間生活の一切を、裏から動かしてゐる祕密力の問題であり、その祕密力の一面が、經濟上の國際的活動にあることも異論のないところであり、——かくて二千年來、人生の裏道邪道を歩き權謀術數の限りを盡して、世界把握を宗教的信念をもつて基礎づけられてきてゐるユダヤ民族は、——特に徹底した個人主義、左翼系のユダヤ人は、今やその全智全能を盡して日本抗勢に暗躍蠢動してゐるのである。

かくて世界の國際情勢は、時局の緊迫と共に政治、外交、經濟悉く、ユダヤ民族の動きを計算せずしては、割り切り得ない幾多の矛盾に直面してゐる現情であり。現在の對米問題も、——このユダヤ問題を通して見る時、ありありとその内幕がうなずけるのである。

三 世界經濟の正體

世界史に於ける大革命は、殆んどすべてユダヤ人による世界經濟獨裁への計畫の實行に關係するものであつた。

かのコロンブスのアメリカ航行も、ユダヤ人マルコ・ポーロの黄金の島ジバング、日本への誘導によるユダヤ人コロンブスの獨占慾に出でしものである。

イギリスのクロムエル革命は、イギリスの王室及び貴族等の所有する、スペイン無敵艦隊撃破後の巨額の經濟力を、ユダヤ人クロムエルが奪取せんとするものに外ならなかつた。

次にアメリカの獨立は、完全にアメリカ・ユダヤ人の獨立計畫であり、獨立以後イギリスとの經濟關係は、獨立前よりも遙かに密切化し、強化するものであつた。

またフランス革命は、明かにブルボン王朝及び貴族等の獨占せる莫大なるフランスの富を、ユダヤ人等が或は唯物思想により、フランスの宗教國家思想を破壊し、或はその物資をユダヤ人が買収することによる、人爲的物資缺乏による革命をもつて、そのフランス人よりの富の奪取にあつた。かくて第三階級の自由解放を名として、革命の眞の勝利者はナポレオンに勝てるユダヤ人ロスチャイルドの財閥であつた。

これ以後、十九世紀を通じ、資本主義の發展は全くユダヤ人による資本の蓄積であり、ここにその階級闘争は、國家財産の自己減を計畫するものであり、ユダヤ人マルクスは、必然に國家否定としてのインターナショナルイズムを最高の目的として強調し、ここに國富は悉くユダヤ財閥に集中されるのである。かのアメリカ南北戦争は、奴隸解放の正義の戦争の如く稱しながら、實はユダヤ人リンカーンが北方の資本力をもつて南部の農業經濟力を、自らのユダヤ經濟圏に編入せんとする、計畫に外ならなかつたのである。

かくして第一次世界大戰を契機として、ロシア及ドイツの王權は否定され、その莫大なる財産はすべてユダヤ財閥のために奪取せられたのである。

そのロシアの赤化共產革命は、一見、資本集中、金融獨裁に反對する如く見せ乍ら、實は分散せし私有財産をすべて没收し、それを國家財産に編入せる如く見せつつ、それは背後のユダヤ財閥に吸集されたのであつた。

かくして 今日の世界經濟組織が、無数の誤謬と矛盾に満ちてゐることは、瞭々として何人も疑はないところである。然らば凡ゆる角度から、人間生活を制限しつつあるこの經濟組織は、一體何物の企畫になるのであらうか？ この事態の根本を極めざる觀念的な政治家、或は經濟人或は經濟問題を多少取り扱つてゐるといふだけで、自分は經濟學者だと自任してゐる著述家——『世界中のユダヤ人を敵とすれば、日本の貿易は意外な邊で益々困難を醸し、將來滿支經營上外資輸入などといふ事も阻害されて望薄となる』といふ點も考

慮に加へねばならぬ、——我々の必要』と叫ぶ麻痺せる人々——がどれ程困窮打破に努力しても、それは『誰か他人が損をしなければ、利などあり得ない』と昔から熟知してゐる國際的ユダヤ人にとつては、彼等の思ふままに彼らの政略を完成させてくれるこれ等の人を蔭で囓つてゐるのである。

——即ち現状のままの打開などといふことは到底出來得る相談ではないのである。

世界の人々は、何故にこの世界經濟の正體を究めやうとしないのであらうか？

此の世界經濟が持つ特色を摘出して、之に吟味検討のメスを入れ、その祕密を暴露して、最後の止めを刺すことは、極めて容易なる事柄である。然るに人々は、滑稽にも、自分達を全面的に壓迫しつつある現下の、世界經濟組織に對して惡意を持たないのみか、寧ろそれを人類を今日の高き生活程度にまで、引き上げて呉れた謝恩すべき形態であるかの如き、不可解なる心情の擒となつて、現状を肯定し、真相を掩蔽する。——何が不思議と

いつてこの位、不思議なことはないのである。

我々は明白に今日の世界經濟なるものは、國際ユダヤ人が建設したものであり、かくして一切の販賣がこの第三者たる國際ユダヤ人の下に隸屬し、彼等はこの世界經濟を永遠に獨占する爲めに、愈々不自然なる貿易を促進し、世界人類に對する神の惠與を破壊し、アジアの民を奴隸となしつつ、益々不合理なる經濟取引を展開し、獎勵することに懸命となつて、あらゆる謀略を注いでゐるのを知るであらう。

かつて日本に對するユダヤ的世界政策が、日本の強力なる意志の發動によつて、著しく動搖するや、ここに全世界をすくつて、ワシントン條約、九ヶ國條約、國際聯盟條約、四國條約、一九三三年の世界經濟會議——これらはすべて打倒日本の道に密接な關係があるのである。

しかるに支那事變の發展は、ユダヤ金權をして、遂にいまやアジア太平洋圏において、

いかに彼等が經濟力を獨占するかによつて、彼等の世界支配的運命は決せんとする現實段階に達した。

しかも、この問題の地點こそ、今正に日本廣域經濟圏の中に必然に包含、再編成さるべき領域なるを知るならば、——ユダヤの生死も、日本經濟力が、この世界經濟の中樞地帯を、いかに處理するかによつて、決定さるべきかを知るであらう。——このことを知悉するが故に、今彼等の謀略は、日本上下のあらゆる地點より張りめぐらされてゐるのである。

今日まで世界經濟史を通じ、最大の物質的地盤であつた、アジア太平洋圏の植民地解放による、眞の皇道統治の下にこそ、始めて人類の世界經濟は、不合理極まる状態から、全面的に脱脚することが出来るのである。

これ以外のいかなる原理方法をもつてするも、すべてはユダヤ的世界經濟機構の中の一

變形に過ぎないであらう。かくて日本經濟は、この世界經濟獨占力と、決定的なる總力戦に進まんとする段階に入つたのである。

今やアジア民族が眞に何にを熱烈に要求しつつあるかを知らねばならない。——支那人、佛印の安南人、海峽植民地のマレー人、フィリッピンの土民、さらにビルマ人、南洋一帯の無数の南洋人、かの莫大なる印度人、——それ等アジアの民族と解放と救済のための戦争こそが、實に我が皇軍の聖戦の大目的であり、これこそが東亞廣域經濟圏の總力战的確保に外ならないのである。

數百年の西歐の植民地擄取に對するアジア解放こそ、世界經濟は始めてその公正なる經營、秩序が建設實現されるのであり、帝國主義的侵略にあらざる皇道による經濟的發展こそ、八紘一字の皇道日本への還元、歸一であり、これこそ、『アジア人の爲めのアジア』を建設する基盤を構成する唯一の日本アジア太平洋圏の統一的復興であり、ここに東亞自給

自足の歡ばしき、一切の搾取なき生活圏が確立されるであらう。

しかもユダヤ世界經濟が、神の秩序を破壊するが如く、日本皇道經濟は、神の秩序に再び機會を與へるであらう。然るに、今や日本の國內には、なほ絶えざるユダヤ世界支配力の一翼として夜の闇の中にうごめく第五列の暗影がある。

日本民族は、全アジアの精神をもつた民族である。日本の行動は最早斷じて他力に依據するものであつてはならない。それはあくまで自己の責任を中心とするものでなければならぬ。

神の信仰は全アジアの純粹な精神である。この皇道日本精神の根源力からのみ、世界光被の新しき平和は、ここに始めて人類の永遠の光となるであらう。

第三篇 日本國民に告ぐ

第一章 未來か没落か！

一 三十年の失政よ！

今や時代は前古未曾有の時勢の推移の中にあつて、世界情勢は、正に急角度の變遷をとげんとする。

十九世紀以來、近代文化として發展し來れる諸文化形態は、過去の古き諸形象として色褪せ、その全本質はすでに誤謬に満ち、今や全く新しき根本的變革を見んとする時期に立ち到つた。

かくてこれまで最も正しく、また新しきものと思はれしものも、實は誤りであり、舊きものとなり、西歐五百年の科學文化も、自ら内的崩壊に直面し、かくて新しき人類、世界の創造を、我日本より全世界に對し、積極的に主張、實踐せんとする新段階に達した。

ここに新しき^{ニホフ}世期が始まり、今や世界史は日本國民によつて書き改められんとする。

十九世紀を貫きし、近代西洋の政治原理はアメリカの獨立、並にフランス革命のイデオロギーによつて、デモクラシーの方向が決定され、これは二十世紀の初頭の第一次歐洲大戰において、英米聯合國の勝利により、遂にその最高調に達するのであつた。

しかもその政治原理は、その根柢において、ユダヤ的なる國家否定の思想であり、それは個人の自由、平等を主張することにより、一切の政治的秩序を破壊せんとする方向を有するのであつた。

かくてそれは必然的に共產主義への發展となり、ここにソ聯の赤化革命、及び三民主義

より容共政策へ移行した蔣政権の如き形を示すに至つた。

かくて國際聯盟なるものの結成は、あくまでも民主主義的現體制を、積極的に固持せんと企圖したものであり、ここに新興國家の發展は、平和に反する行爲として絶対に否定され、或は侵略主義、或は獨裁主義なりとして、いかなる正しき國家の生命的進出に對しても、執拗にこれを抑壓し來つのであつた。

しかもかかる歐米の自由主義、平等主義とは、その本質において有色人種の自由の否定、平等の拒否なる植民地奴隸化の上に、漸くその發展を可能になせしものであり、彼等の有する思想的僞善性は、今更批判暴露するまでもなく、すでに我等の屢々強張し來つたところである。

なほ我等は歐米のデモクラシーをもつて、近代的進歩的なりとして、それに愚にも追隨せしめ、一方キリスト教人道主義の宣傳によつて——その表面的平和主義は、あらゆる被

壓迫民族をして、自らの獨立解放の爲めの眞の熱意を混迷冷却せしめる方向に導くのであつた。

このことは我國にあつても、大正時代より昭和の初期に亘つて、最も顯著なる傾向を示したのであり、デモクラシー、自由主義は、まさに我國を風靡し、ここに極端なる政黨至上主義の抗爭の中に、最上の表現を見るのであつた。

諸君は知らるるであらう。當時の日本の政治家と稱せられるものは、すべて政黨あつて國家あるを知らず、その屬する政黨擴大のためには、あらゆる政治的不正をも敢て爲し、その政黨の背後にありし金權主義と結託して、ここに恐るべき政治的罪惡の數々を犯し、徒らに多數を擁しては、政權を獨占せんことに奔命し、かくて新聞、雜誌等の言論、ジャーナリズムの掌握となり、彼等の罪をすべて隠匿し、かかる行爲をもつて、むしろ最も正しき政治なるかの如く宣傳したのであつた。

大正初期より今日の政黨解消の時期に至る約三十年間こそは、日本政治の最惡の頽廢を示せる時であり、この時代において日本の國家的エネルギーは萎縮沈滞して、單に資本主義的金權の獨裁と化し、軍備は傷ましき敗戰國の如く縮少せられ、日本の民族的發展は、帝國主義的侵略なりと日本人自ら公然と排撃し、軍民離間、國內頽廢の状態は、まさに亡國の危機さへ生じたのであつた。

この間、世界的恐慌の嵐は、社會不安を益々激化し、ここにソ聯の赤化革命は、ユダヤ的宣傳と共に、日本内部の共產革命化を策謀し、それは幾次かの大檢舉によりて辛くもその危局を脱却し得たのであつた。

殊に大學及言論思想界は、社會主義的傾向最も著しく、つとにその温床と化し、インテリゲンチヤは悉くこの赤化的なる自由主義の洗禮を受けこの大なる贖金の洪水のうちに、數へることの出来ない夥しい我が日本の青年達は溺死した。

社會的混亂とその矛盾對立は、益々尖鋭化し、徒らにデマゴグのみが盲動し、純眞なる理想を有する青年層は、これに毒せられ、誘惑せられ、或は都會を逃避せんとし、或はデカダンスに走り、この若き情熱は、當時の現狀にあきたらず、その不法なる日本の金權主義者が、政黨を賣收し、言語に絶する弊政を公然となしつゝあつたことに對する、憤然たる國民的爆發としての赤化運動を激發せしめたのであつた。

見よ！ 犬の如く金權の前に跪坐し、それに隸屬する政黨政治家の姿を。——彼等は全く政治家として何らの識見、良心、資格、國策を有せずして、しかも恬として顧みず——否、この時代にあつては、政治家としての眞の資格、本質を有する者は、所謂彼等の稱した政治家とはなり得ない現狀であつたのである。

このことは果して今日に於いて、全面的に變革されたと言へるであらうか？

當時彼等の惡弊は、極めて巧妙な手段により隱蔽され、——政治は一切利己的政黨によ

つて左右されるは勿論、或はジャーナリズムを買收して却つて一般人心の好感共鳴さへも博さんとし、従つて眞實ならざる捏造作爲の宣傳が横行し、そこでは莫大なる私利を獲得した某政治家も清貧なりとして稱讃され、或は最も利己的なる私利私慾の徒が却つて最も社會的進歩的政見を有するか如く擬裝され、これに對し一般國民は目かくしされ何等の眞偽を知ることなくして、これらに對して輿論は、鋭き批判も加へずただ徒らに盲從するのみであつた。

外に對しては、殊に外交方針は、全く英米追隨媚態の極度を示し、日本の大陸、大洋への進出は悉く抹殺され、日本の國力は軍備縮少によつて著しく低下し、しかもこの絶對絶命の危機は、却つて物價安によつて、日本商品の海外進出には、驚異すべき好條件を誘起し、ここに日本商品の世界市場への驚くべき氾濫となつていつた。

これに對し英米資本は、これをソシアル・ダンピングなりとして、飽迄高率の關稅障壁

をもつて排撃し、——同時に日本の内部的混亂と政治的頹廢とに乗じて、英米ソは支那に對し積極的に進出し、抗日工作を極力企圖するに至つたのである。

この内外よりの最大の壓迫が、最高度に達した時、滿洲事變による日本の爆發となり、國際聯盟は拒否され、ここに世界維新戰の序曲は、一はアジアの反撃を呼び、内にあつては國內革新の強烈な要望となつていつたのであつた。

二 現代の特徴

かの日本の滿洲事變こそ、二十世紀の舊秩序破壊の最初の世界史的事象であり、これにより英米の世界經濟獨裁は破れ、赤化の世界革命は反撃せられた。

しかも全く無理解なる英米及び國際聯盟は、新しき國家建設を些かも認識せず——日本

の正義は彼等の認識の極限外にある——これを單に帝國主義的侵略なりとして、我を批判、誹謗しつつ、實は自らの醜を自己暴露するのみであつた。

今やその不合理に掠奪せし驕慢なる國家、侵略民族に對し、最大の審判が斷乎として下されんとする。

今やイギリスは完全に崩壊しつつある。ここに没落し行くイギリス議會の如く、それを典型とせる日本の政黨政治もまた必然に没落する。

かくてそれに養はれし、一切の政治思想、また政治家も、これと共にすべて後退、顛落し行くは餘りにも歴史的必然の運命である。まさに一日にして一年、一年にして一世紀、或は數世紀を経過する如き現代にあつて、この時代の激遷によつて、あらゆる新陳代謝の高速度に實現されるのは自明の理にして、これがたとへ表面的になされずとも、最早舊時代人は、現在その社會的地位を有するも、蟬のぬけがらの如く、彼等自身、全く現代の情

勢判断の正確を缺き——將來に對する何等透徹せる推測も不可能となり、かくて自らの痴性を笑はずして、愚にも複雑怪奇なる嘆聲を放つて、現代より退場没落せざるを得ないのである。

この嚴肅にして驚くべき史代の急轉こそ、現代日本の姿であり、——日々の現象に盲目的に追従して、ただ客觀的情勢の判断にのみ依存するものは、——恰も敵の與へた情報により、戦術を組立てんとする劣等なる軍人の如く——悉くその政策は後手となり、時期を失し、遂に頭鈍機を知らず、徒らに事態を遅延澁滞せしめ、日本國民の困苦を倍加し——しかも彼等は利己的なる意識よりして、何ら責任の重大性を感じず、——それが直ちに國家國民に與へる致命傷なるをも知らず、——或はたとへ知るとも、それを胡麻化し、責任迴避の無意義なる辯解をなさんとする。ああ、彼等はすでに、現實の偏狹なる經驗、貧困なる知性の地獄の中に陥落し、それ以上の世界認識をすべて喪失したる没落人に外ならな

るのである。

かかる政治家の——日本指導者の中に——いかに多く我々はこれを見、これらの存在に黙ゆる怒りと深き悲しみを味つたことであらうか。

勿論翻然過去の非を悟り自ら、反省是正して新しき方向に轉向することは、今日の如き時代にあつては、最も重要な態度處置と言へるの あるが——しかも我等の見るところをもつて直言すれば、——彼等の多くは表面轉向するとも、それは本質的變換にあらずして、單に現象的に、自らの危険を感じて追従變化するにとどまり——かくて彼等は『戦争か平和か』の重大岐路に遭遇するや、再び以前の錯誤を犯し、日本國民の正しき直感を、無意味に混迷の中に突き落すが如き愚を敢て爲すのである。——かかる人間こそ、一度び自己の有利な突發事が生ずれば、忽ち過去の舊體制に歸り、しかも恬として些かも恥ぢない國匪の如き存在である。

今日政治の新體制が盛んに主張され、雨後の筍の如く革新陣營なるものが生れつつある。しかもこの時、日本國民にとつて最も必要なることは、心眼を開いてこの新體制論者革新陣營に關し、いかなる人物が、いかなる態度で、これを主張し、これに參與し、その方向、組織を構想工作しつつあるかを、凝視しなければならぬ。何となれば現代にあつては、ある政策の致命的失敗は、たゞちに我々個人の生活、生命に影響を及ぼすものだからである。

我々は日本の政治新體制が、世界維新の重大なる志向を決定するものとして、過去の鳩毒たる英米的デモクラシーと決定的對立を必然化することにのみ、その眞の意義を見出すと同時に、この暴戻極まる侵略者に對し、斷乎たる否定をなすことこそ、我が八紘一字の聲國の精神が、眞に世界苦の救済となり、始めて虐げられしアジア十億の諸民族は、ここに眞の人間としての喜びを恢復することを得ると信するものである。

ここに我等は衷心より、日本國體の永遠の明徴を志念するのであるが、いま大政翼賛、一君萬民の美名の下に——幾多過去の清算すべき舊體制のむしろ新しき装をもつて出現し來るものにあらざるやと——寒心警戒するものである。——この重大なる時局にありて、その衝に當るものの、最も自らの反省を深くし、慎重に自肅自戒絶對に利己的なる權勢慾にとらはれることなく、滅私奉公の忠誠を、ただ口にするのみでなく、現實に履行實踐されんことを、——これのみ現代政治家の最大の資格である——我等は要求する。

しかも尙大政翼賛の美名にかくれ、私利を計るものあらば全國民は一體となつてこれを撲滅し、この不忠の臣の屍を踏み越えて、天の命する正しき道に前進するであらう。

見よ？ 日本のこの世界史的發展に對し、英米舊勢力の對日共同戦線は益々激化、愈々彼等の爲めの世界制覇にあらゆる手段を弄せんとする。

かくして日本の南方圈確立の時期の一刻遅ければ遅き程、インド洋、太平洋戦争の危機

は却つて切迫する。我等が起つ可きは正に今日にある。機は眼前にあり。天は正義に與みし、神は忠誠に感奮せん。——今や日獨伊三國同盟により大東亞圏の指導權を有する日本は、英米の抗戦力をして、全く絶滅せしむべき南方圏の獲得をなすことをもつて、眞に皇道世界平和の爲めの絶對的至上命令として即時決行すべきである。

これこそ畏くも三國同盟に下し給ひし大詔の聖旨——皇道世界宣布に、眞に副ひ奉る絶對忠誠の道である。

日本國民よ！ 聖戰とは何を意味するのか！ 日本は何の爲めに戦つてゐるのであるか！ 單に排日抗日支那人を撃破するために、無限に尊き犠牲と消耗を敢て爲したのであるか！ ああ皇戰ここに五周年にして、全日本人は、悉く、悲痛なる貴き體驗と苦惱とを通じ、何ものが最大の日本の敵なるかを十全に確認した。——しかも彼等のその背後に秘む、世界史上最惡の罪を犯し來れる老獪なる人類の敵に對し、敢然として全人類救出の大

御戰を宣戰せんとする、決定の瞬間に立つ。

もしこの秋日本國民にして後退せんか、『西洋の没落』は一轉して『東洋の没落』となり、日本、否世界の人類は英米世界政策の餌食と化するであらう。

すでに新しき世界戦争は、一國家、一民族を完全に破壊、絶滅すべき全體戦争であり、この痛切なる意義を把握することこそ、眞の總力戦の本質である。

日米會談は愈々決定的段階に達した。

世界の運命を決する骰子は今投げられんとする。

ああ！ 未來か？ 没落か？

しかも日本及び日本國民の爲すべき目的、進むべき方向は、あまりにも鮮明に呈示されてゐる。

知らず、ルビコンを前にして日本は尙徒らに躊躇し、逡巡せんとするのであるか？

第二章 日本世界戦争

來るべき一九四二年の最大危機を前にして、世界はいかなる方向に進むのであらうか？
しかも日本は、來るべき危局に——果して歐米の老なる軍備に對して、いかなる對抗
を爲し得るや？

日獨伊三國同盟に對するアメリカの對立は、すでに世界の決定的戦争に入る必然性を有
し、彼は東亞に於ける米人の引揚げを斷行した。

今や獨伊は英と最後の死戦をなしつつ、しかもヨーロッパの内的否定としてのソヴェ
ト・ロシアとの徹底的死闘を激化しつつある。

ここに歐洲がすでに經濟的物質的に消耗し盡せる時、イギリスは歐洲を放棄するであら
う。しかも彼はその代償として西半球そのものをアメリカと合作して獲得せんとする。

ここにイギリスはカナダ或は濠洲を根據地として南洋、南アメリカ、インド等の再統一
を英米共同の下に實現し、日本封鎖を執拗に實行するに至るであらう。

しかも一方、イギリスはナポレオンに於けるモスコの如く、イギリス本土を焦土とし
て、消耗戦によるドイツを屈服せしめんとする。

何ぜなら歐洲大戦の絶滅戦は、必然全歐に食糧難をもたらし、同時に全歐の赤化は今後
愈々猖獗を極めるであらう。

この時英米はソ聯をして彼等の勢力と合流せしめ、或はアジア大陸をソ聯に一任し、イ
ギリスは大海軍を一擧にインド洋、南洋、東洋に向け、同時にアメリカは全海軍を太平洋
に集結し、英米ソの大空軍は日本の南北より本土を脅威し、東亞新秩序にあくまで絶對反

對の態度をもつて日本を制壓せんとする。

日本はまさにかかる絶對絶命の危機線上に立つ。

果してこれを日本はいかに克服せんとするや。彼等の脅威に怖れて、垂涎無爲に終り、遂に今次事變の一切を空しく失つて、アジア大陸より後退し、奴隸生活の如き悲境に陥らんとするのであるか！しかも靖國の英靈は、いかにして護國の鬼と化したのであるか？

問ふ然らば我等はこれに對しいかなる對策をもつて進むべきであらうか？

我々はこれより眞の本格的戦争の開始せらるるを堅く決意せねばならぬ。

○今や日本は即時支那におけるイギリス租界の回收、利權の抑止、さらにタイ國よりビルマ海峡植民地——南洋及インド洋に對し、直ちに積極的な進出を執行すべきである。

この東亞より南太平洋に亘る地域の占領こそ、——日本アウタルキーの確立であり、これによつて日本はいかなる長期戦にも耐へ得るであらう。

しかも現在日本は積極的に生産力の擴充、物動計畫を實行しつつあるのであるが、その計畫は日本南方圏の急速なる確保なくしては、絶對にアウタルキーは不可能なることを實證する。

この時イギリスの經濟圏は極度に脅かされ、インド、濠洲、南洋は遮斷され、大英帝國は三百年の極悪史を終るべき致命的没落に瀕するであらう。

かくて果してアメリカの經濟力が安固たり得るであらうか？ 唯物的利益を目的とするアメリカ内部に、猛烈なる戦争反對運動が勃發し、アメリカ自らの弱點を暴露し、内部分裂による國家崩壊も豫測し得るのではあるまいか。

ここに英米對日本の長期戦の本質が展開し、百年戦争の叫ばれる根據があるのである。今や獨伊の歐洲新秩序は、それ自體にては自給自足は不可能であらう。かくて日本のアジア太平洋圏の指導的確保は、——歐洲救出のための日本の南方物資

と、インド洋ルートの獲得を熱心に切望するであらう。

我々は日獨伊三國同盟、今次の聖戦をもつて、世界維新建設への第一段階と思念し、ここに皇道世界宣布光被に對する、英米の挑戦を見、この日本對英米の長期戦のためにこそ我高度國防國家體制は要求されるものと思惟する。このためにこそ全日本人の總動員的戦争體系の全面的確立を必須とするものなるを思ふのである。

しかも東亞新秩序建設は、必然に東亞自給自足圏の確立を必須とし、ここに皇道による日本南方圏の廣地域空間確保を絶対に要求する。

まさに今回の支那事變は、今後、日本を中心とする世界興廢の長期戦の發端とも見られるであらう。

現代のこの壯大無比な史的轉換——世界の全面的維新の變轉において、日本國民は眞に日本の使命とエネルギーがいかに根本的なる決定力たるからを深く深く自覺しなければならぬ。

らぬ。ここに日本及日本國民により世界維新が全面的に實現され、誤まれる西歐獨裁の諸形態は、根本的に否定されんとする世界史的時期に立つを知るであらう。

かつてマルコ・ポーロによつて西歐侵略の慾望が示されし黄金の島ジバング(日本)——この彼等の最後の目的を達せんとして、蔣介石の背後にあつて、抗日即時決戦を煽動し、支援せる敵(英米ソ)は、今やそのマルコ、ポーロの橋——蘆溝橋畔の一發により、その没落の戦ひは始められんとし、まさに聖戦五年、彼等の抗日の據點——天津、上海、香港等はすでに支那人による排敵の焦點たらんとし、さらに海南島、新南群島の水平線の彼方——ビルマ、ヒマラヤの上空に——アジア十億の本願は、——我皇道の光を欣求して一日千秋の思ひにて手を額にし衷心より日本の救出を待ちつつある待望の叫びを聞く。

想へば遠く二千六百年、日本史に於ける諸々の戦争は、洵に來るべき世界維新戦のための準備戦であり、その十全なる實戰的訓練であつたのではあるまいか。

この唯一なる大義の戦争に對する最高の信念——大御戰に於ける皇軍の絶對的精神こそ、實に世界史上、日本民族が、數千年に亘り、聖戰のための生命を賭せる鍛錬と、そのために眞に生くべき無私の行を體驗、實現し來つたのであつた。

この日本の新しき方向こそ、久しく切斷されし、『日本上代太平洋文化圈』の輝しき復興である。

今や日本國民は、まさに新しき決定的段階に入らんとする時、肇國の神勅皇祖皇宗の御遺訓及今上陛下の大詔の下に、世々その美をなせる一君萬民の總力を擧げて、『益々國體の觀念を明徴にし深く謀り遠く慮り協心戮力非常の時局を克服し以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉らなければならぬ。』

附・戰陣訓

陸訓第一號

本書ヲ戰陣道徳昂揚ノ資ニ供スベシ

昭和十六年一月八日

陸軍大臣 東 條 英 機

戰陣訓

序

夫れ戰陣は、大命に基き、皇軍の神髓を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、

附・戰陣訓

遍く皇道を宣布し、敵をして仰いで御稜威の尊嚴を感銘せしむる處なり。されば戰陣に臨む者は、深く皇國の使命を體し、堅く皇軍の道義を持し、皇國の威徳を四海に宣揚せんことを期せざるべからず。

惟ふに軍人精神の根本義は、長くも軍人に賜はりたる勅諭に炳乎として明かなり。而して戰陣竝に訓練等に關し準據すべき要綱は、又典令の綱領に教示せられたり。然るに戰陣の環境たる、兎もすれば眼前の事象に捉はれて大本を逸し、時に其の行動軍人の本分に戻るが如きことなしとせず。深く慎まざるべけんや。乃ち既往の經驗に鑑み、常に戰陣に於て勅諭を仰ぎて之が服行の完璧を期せむが爲、具體的行動の憑據を示し、以て皇軍道義の昂揚を圖らんとす。是戰陣訓の本旨とする所なり。

本訓 (其の一)

第一 皇國

大日本は皇國なり。萬世一系の 天皇上に在し、肇國の皇謨を紹繼して無窮に君臨し給ふ。皇恩萬民に遍く、聖徳八紘に光被す。臣民亦忠孝勇武祖孫相承け、皇國の道義を宣揚して天業を翼賛し奉り、君民一體以て克く國運の隆昌を致せり。

戰陣の將兵、宜しく我が國體の本義を體得し、牢固不拔の信念を堅持し、誓つて皇國守護の大任を完遂せんことを期すべし。

第二 皇軍

軍は天皇統帥の下、神武の精神を體現し、以て皇國の威徳を顯揚し皇運の扶翼に任ず。常に大御心を奉じ、正にして武、武にして仁、克く世界の大和を現するものは神武の精神

なり。武は嚴なるべし仁は遍きを要す。苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ断乎之を撃碎すべし。假令峻嚴の威克く敵を屈服せしむとも服するは撃たず従ふは慈しむの徳に缺くるあらば、未だ以て全しとは言ひ難し。武は驕らず仁は飾らず、自ら溢るるを以て尊しとなす。皇軍の本領は恩威並び行はれ、遍く御稜威を仰がしむるに在り。

第三 軍紀

皇軍軍紀の神髓は、畏くも大元帥陛下に對し奉る絶對隨順の崇高なる精神に存す。

上下齊しく統帥の尊嚴なる所以を感銘し、上は大權の承行を謹嚴にし、下は謹んで服従の至誠を致すべし。盡忠の赤誠相結び、脈絡一貫、全軍一令の下に寸毫紊るるなきは、是戦捷必須の要件にして、又實に治安確保の要道たり。

特に戦陣は、服従の精神實踐の極致を發揮すべき處とす。死生困苦の間に處し、命令一下欣然として死地に投じ、黙黙として獻身服行の實を擧ぐるもの、實に我が軍人精神の精

華なり。

第四 團結

軍は、畏くも大元帥陛下を頭首と仰ぎ奉る。渾き聖慮を體し、忠誠の至情に和し、擧軍一心一體の實を致さざるべからず。

軍隊は統率の本義に則り、隊長を核心とし、鞏固にして而も和氣藹々たる團結を固成すべし、上下各々其の分を嚴守し、常に隊長の意圖に従ひ、誠心を他の腹中に置き、生死利害を超越して、全體の爲己を没するの覺悟なかるべからず。

第五 協同

諸兵心を一にし、己の任務に邁進すると共に、全軍戦捷の爲欣然として没我協力の精神を發揮すべし。

各隊は互に其の任務を重んじ、名譽を尊び、相信じ相援け、自ら進んで苦難に就き、戮

力協心相携へて目的達成の爲力闘せざるべからず。

第六 攻撃精神

凡そ戦闘は勇猛果敢、常に攻撃精神を以て一貫すべし。

攻撃に方りては果斷積極機先を制し、剛毅不屈、敵を粉碎せずんば已まざるべし。防禦又克く攻勢の銳氣を包藏し、必ず主動の地位を確保せよ。陣地は死すとも敵に委すること勿れ。追撃は斷々乎として飽く迄も徹底的なるべし。

勇往邁進百事懼れず、沈著大膽難局に處し、堅忍不拔困苦に克ち、有ゆる障碍を突破して一意勝利の獲得に邁進すべし。

第七 必勝の信念

信は力なり。自ら信じ毅然として戦ふ者常に克く勝者たり。

必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず、須く寸暇を惜しみ肝膽を碎き、必ず敵に勝つの實

力を涵養すべし。

勝敗は皇國の隆替に關す。光輝ある軍の歴史に鑑み、百戰百勝の傳統に對する己の責務を銘肝し、勝たずば斷じて已むべからず。

本訓 (其の二)

第一 敬 神

神靈上に在りて照覽し給ふ

心を正し身を修め篤く敬神の誠を捧げ常に忠孝を心に念じ、仰いで神明の加護に恥ぢざるべし。

第二 孝 道

忠孝一本は我が國道義の精粹にして、忠誠の士は又必ず純情の孝子なり。

戦陣深く父母の志を體して、克く盡忠の大義に徹し、以て祖先の遺風を顯彰せんことを期すべし。

第三 敬禮舉措

敬禮は至純なる服従心の發露にして、又上下一致の表現なり。戦陣の間特に嚴正なる敬禮を行はざるべからず。禮節の精神内に充溢し、舉措謹嚴にして端正なるは強き武人たる證左なり。

第四 戦友道

戦友の道義は、大義の下死生相結び、互に信頼の至情を致し、常に切磋琢磨し、緩急相救ひ非違相戒めて、俱に軍人の本分を究るるに在り。

第五 率先躬行

幹部は熱誠以て百行の範たるべし。上正しからざれば下必ず紊る。戦陣は實行を尙ぶ。

躬を以て衆に先んじ毅然として行ふべし。

第六 責任

任務は神聖なり。責任は極めて重し。一業一務忽せにせず心魂を傾注して一切の手段を盡くし、之が達成に遺憾なきを期すべし。

責任を重んずる者、是眞に戦場に於ける最大の勇者なり。

第七 死生觀

死生を貫くものは崇高なる獻身奉公の精神なり。

生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。身心一切の力を盡くし、從容として悠久の大義に生くることを悦びとすべし。

第八 名を惜しむ

恥を知る者は強し。常に郷黨家門の面目を思ひ、愈愈奮勵して其の期待に答ふべし。

附・戦陣訓

生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ。

第九 質實剛健

質實以て陣中の起居を律し、剛健なる士風を作興し、旺盛なる士氣を振起すべし。陣中の生活は簡素ならざるべからず。不自由は常なるを思ひ、毎事節約に努むべし。奢修は勇猛の精神を蝕むものなり。

第十 清廉潔白

清廉潔白は、武人氣節の由つて立つ所なり。己に克つこと能はずして物慾に捉はるる者、争でか皇國に身命を捧ぐるを得ん。

身を持するに冷厳なれ。事に處するに公正なれ。行ひて俯仰天地に愧ぢざるべし。

本訓 (其の三)

第一 戦陣の戒

一、一瞬の油断、不測の大事を生ず。常に備へ嚴に警めざるべからず。

敵及住民を輕侮するを止めよ。小成に安んじて勞を厭ふこと勿れ。不注意も亦災禍の因と知るべし。

二、軍機を守るに細心なれ。諜者は常に身邊に在り。

三、哨務は重大なり。一軍の安危を擔ひ、一隊の軍紀を代表す。宜しく身を以て其の重きに任じ、嚴肅に之を服行すべし。

哨兵の身分は又深く之を尊重せざるべからず。

四、思想戦は、現代戦の重要な一面なり。皇國に對する不動の信念を以て、敵の宣傳欺

瞞を破推するのみならず、進んで皇道の宣布に勉むべし。

五、流言蜚語は信念の弱きに生ず。惑ふこと勿れ、動ずること勿れ。皇軍の實力を確信し、篤く上官を信賴すべし。

六、敵産、敵資の保護に留意するを要す。

徴發、押收、物資の燼滅等は總て規定に従ひ、必ず指揮官の命に依るべし。

七、皇軍の本義に鑑み、仁恕の心能く無辜の住民を愛護すべし。

八、戦陣苟も酒色に心奪はれ、又は慾情に驅られて本心を失ひ、皇軍の威信を損じ、奉公の身を過るが如きことあるべからず。深く戒慎し、斷じて武人の清節を汚さざらんことを期すべし。

九、怒を抑へ不満を制すべし。「怒は敵と思へ」と古人も教へたり。一瞬の激情悔を後日に残すこと多し。

軍法の峻嚴なるは特に軍人の榮譽を保持し、皇軍の威信を完うせんが爲なり。常に出征當時の決意と感激とを想起し、遙かに思を父母妻子の眞情に馳せ、假初にも身を罪料に曝すこと勿れ。

第二 戦陣の嗜

一、尙武の傳統に培ひ、武徳の涵養、技能の練磨に勉むべし「毎事退屈する勿れ」とは古き武將の言葉にも見えたり。

二、後顧の憂を絶ちて只管奉公の道に勵み、常に身邊を整へて死後を清くするの嗜を肝要とす。

屍を戦野に曝すは固より軍人の覺悟なり。縦ひ遺骨の還らざることあるも、敢て意とせざる様豫て家人に含め置くべし。

三、戦陣病魔に斃るるは遺憾の極なり。特に衛生を重んじ、己の不節制に因り奉公に支障

を來すが如きことあるべからず。

四、刀を魂とし馬を寶と爲せる古武士の嗜を心とし、戦陣の間常に兵器資材を尊重し、馬匹を愛護せよ。

五、陣中の徳義は戦力の因なり。常に他隊の便益を思ひ、宿舎、物資の獨占の如きは慎むべし。

「立つ鳥跡を濁さず」と言へり。雄雄しく床しき皇軍の名を、異郷邊土にも永く傳へられなきものなり。

六、總じて武勳を誇らず功を人に譲るは武人の高風とする所なり。

他の榮達を嫉まず己の認められざるを恨まず、省みて我が誠の足らざるを思ふべし。

七、諸事正直を旨とし誇張虚言を恥とせよ。

八、常に大國民たるの襟度を持し、正を踐み義を貫きて皇國の威風を世界に宣揚すべし。

國際の儀禮亦輕んずべからず。

九、萬死に一生を得て歸還の天命に浴することあらば、具に思を護國の英靈に致し、言行を慎みて國民の範となり、愈々奉公の覺悟を固くすべし。

結

以上述ぶる所は、悉く勅諭に發し、又之に歸するものなり。されば之を戦陣道義の實踐に資し、以て聖諭服行の完璧を期せざるべからず。

戦陣の將兵、須く此の趣旨を體し、愈々奉公の至誠を擢んで克く、軍人の本分を完うして、皇恩の渥きに答へ奉るべし。

後 詞

第一篇の評傳について讀者に先づお願したい注意は、この短い評傳は單に讀むための評傳として書いたのではないことである。

一見さるるが如く、この評傳は一個の拙いデッサンに過ぎない。

生ける人物の——しかも國家の宰相として、その一舉一動に世界の眼が集中されつつある——従つて人間活動の最も盛んな生活を送りつつある現存の人物を描くことは、そのこと自身すでに私には困難なることであつた。

併し其をも顧みず、今度俄かに或る事の爲めに出版することになり。ここに多くの人々の美しき御盡力にもかゝわらず、未熟なる私には、充分御期待に沿ふ如くこれを表現する

ことの出来なかつたことは、——何よりも私自身遺憾此の上もなきことであり、——改めて衷心よりお詫び申し上げます。

さらに第二篇、第三篇の評論は、われわれ日本人は、この世界史的變革期にあつて、徒らに懷疑し逡巡すべきではなく、寧ろ一つの新しい方向に對し、創造的なる出發を勇敢になさんとする決定の時機である。——即ち日本の進べき方向への暗示と示唆であり、現在我々と共に皇道世界維新運動に挺身されつつある若き血盟の同志への「宣誓」であり、同時に同憂の戰士數千への「呼びかけ」である。

勿論、此の外にも書くべき多くの問題——回教團問題、支那事變の解決、大東亞共榮團の確立、或は新指導者原理、さらに太平洋問題等々——を有ちながら、色々の事情の爲め省略をよぎなくされたことは、残念此上なく思つて居ります。

次に本書は日米交渉の歴史的最後を飾る、來栖大使のアメリカ派遣をもつて書きはじめ

られ、夙に東條首相の決意と信念を最後まで信じてゐた私は、——ある神靈に觸れて我が心眼に豫感された如く——遂に、長くも二六〇一年十二月八日午前十一時四十分、暴戾米英に對する宣戰布告の世界史的世紀の大詔が下された奇しき運命の日に筆を擱いたのであります。この戰爭こそ第一は皇國自存自衛の爲めの正義の戰であり、第二は東亞十億生靈解放の爲めの聖戰であり、第三は世界人類二十一億の平和の爲めの八紘一字の大皇戰であります。

かくて我等の主張たる世界維新の方向への攘夷實現は、ここに世界史の新しき轉換となり、さらに全世界に對する皇道光被の世界的大宣言となつて、日本世界史的意味に於ける新しき光、世界創造の莊嚴なる日を迎へたのであります。

最後に、此書を出版するにあつて、種々の御盡力を賜つた、荻洲立兵閣下、伯爵奥保夫閣下、子爵大島陸太郎閣下、菱田菊次郎閣下、日夜多忙なるにも不拘、最後まで我々を

御鞭撻、御指導賜つた東條首相秘書官赤松大佐殿——並に幾多の甚大なる便宜を與へられた燃ゆる同志の鞭撻に對し、重ねて深く感謝する次第であります。

(完)

東條英機と世界新

不 許
複 製

發行所

昭和十七年一月四日印刷
昭和十七年一月八日發行

定價 參 閱
特價 貳圓五拾錢

著 者

タカムラ

東

陽

東京市江戸川区小岩町一ノ三七二
發行所 皇道世界維新本部

代表者 岩 佐 圭 柴

東京市京橋區橫町三ノ三(長澤ビル)
印刷所 アジア青年社印刷部

岩 佐 圭 柴

東京市京橋區橫町三ノ三(長澤ビル)

ア ジ ア 青 年 社

電話京橋(56)五五八七番
振替東京一七一七九四番
會員番號一〇一〇六八番

元 給 配

九ノ二町路淡區田神市京東・社會式株給配版出本日

919
501

